
フィオナ

あゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フイオナ

【NZコード】

N1534R

【作者名】

あゆみ

【あらすじ】

とある國のお姫様と軍人の恋物語

序章 読み部はむと読み（前書き）

序章です。

少し長くなりますが、どうぞお付き合ってください。

序章 語り部は切と語る

静かな夜だった。

いや、静か過ぎる夜だった。

風の音も、星達の瞬きも、何もかも全てが凍りついてしまったような夜だった。

そろそろ秋も終わり、冬が訪れる季節。いつもならば冷たい風が唸り声を上げ、軽やかにその身を翻している季節だ。なのに、この静けさは一体どうしたことだらうか。

夜陰に紛れて飛び遊ぶ蝙蝠の羽音も、闇に溶ける梟の歌声も、何もかも全てが消えてしまった。

『約束よ』

その人は、白く細い人差し指を唇に当て、全てのものに語りかけた。

『あたしがここを出ていくこと、どうか、秘密にして

お願ひね、とその人は笑む。

無言のうちに、全てのものはそれを承諾した。

だからお喋りな風も、星も、動物達も、全では口を噤んだ。何かの弾みで、間違つても溢してしまわないように。

全てのものが、口を噤んだ。

夜の帳が、物語を紡ぎ出した。

良い月夜。

煌煌と、鮮やかに光るあの月のいやはなんと美しいこと。眼福

眼福、目^の保養。

んん？ おやおや、これはお美しいお嬢さん。こんな遅い時
間にどうなされました？ ほう、月が明るくて寝つけないと？ あ
あ、確かに確かに。貴方の大きな瞳はまだきらきらうと月のよう
に輝いていらっしゃる。その輝きでは、睡魔など近づいても来ない
でしよう。

それではお嬢さん、わたくしめの物語などいかがでしよう？
そうですねえ、この月夜に相応しい、恋の物語など如何で御座い
ましょ？

まだまだ未熟なわたくしの物語とて、貴方の暇つぶしくらいには
なりましょ。おや？ そちらにおられる気高き紳士殿。どうなさ
れました？ なんと、貴方も月が明るくて眠れないと、この語部の
話を共に聞いてもよろしいか、と。ええ、それはもう、勿論で御座
いますとも。お客様は多い方が良いのですからね。大歓迎で御座
います。ああ、そんな後ろではなくこちらの方へ。ずずいづい、と。
それでは、お集まりの皆さま方に、まずは感謝を致しましょう。
今宵、この素晴らしい月夜。よつこそお集まりくださいました。こ
の語り部の物語、楽しんで頂ければこれ幸い。

とまあ、挨拶などはほどほどにして、物語を始めましょ？ そ
れでは皆様、お静かに。今宵は月がとても美しいとは思いませんか？
ほら、御静聴下さいませ。そうつと耳を澄ましてみると、優しく
柔らかな月のささやきが聞こえてくるよつては御座いませんか。

ああ実に、それ程までに美しい。

さて、皆々様のお時間を、ちょいと拝借して語りますのは、それ
は傭き物語。美しき月夜を舞台にこの物語。わたくしめのような若
輩者が語るのもどうかと思いますが、どうかどうか、最後までお付
き合いくださいまし。

切。

語部は、小弦を爪弾く。

傭き調べは風に乗り、月明かりに溶けた。

それでは、前置きはこの辺に致しまして、そろそろ始めると致しましょうか。東の空が白み、鮮やかな紅に色付き始める前に、話を始めてしまいましょう。

これは、夜の物語にござります。

お日様には少々悪いのですが、きらきらと眩しい日の光の下では趣も何もありません。淡い淡い、柔らかな月明かりの下でこそ映える物語。月のような、傭い光の下でこそ映える物語。

それでは皆々様、ござむれいと。

第一章 月の庵と闇の巻（前書き）

第一章始まりました。
どうぞ、じっくりご覧ください。

昔々あるといつこ、といつ出だしあは皆様も幼い頃から幾度となく聞いたことでしょう。この物語もそれとおんなじ。昔々のどこの国での物語で御座います。

おや、それでは聞く意味がないと仰るのでですか？ お密様、短気は損氣と申します。もう少し、一言三言聞いていかれても構わないでしょ。この物語はね、特別なんです。まだ誰にも語つたことがないのですから。ふむそれならば、と。そいつ、お掛けになつて下さいな。

さて、この物語は皆々様のお爺様のそのまたお婆様のそのまた……と続き、誰の記憶にも残つていないほど古い話で御座います。ま、ほんの少しこの語り部が味付けをしておりますがね。

そういう訳で、昔々、どれほど古い話なのかも分からぬほど遠い昔、『武の国』とが高いとある王国が御座いました。それはかつて栄華を極めた今は無き大国、スワラージ。

その国に、一人のとても美しい姫君が居りました。

まるで夜の闇のような色合いの真つ直ぐな長い髪に、とろりと蜜を流し入れたかのような鮮やかな金色の瞳。やわらかな白桃の頬に、赤い唇。

『上質な宝玉よりも美しく、白鳥の翼よりも優美な方だ』

彼女を一目でも見た者は皆、口々にそう語り、贊美しました。

彼女の名前は、『マリア』と言いました。

『なんと美しく、閑雅なお名前だらうか』

その名前を一度でも聞いた者は皆、口々にそう語り、贊美しました。

城の一室であたしは一人、机に向かっていた。

硝子の万年筆をゆらゆらと所在無さげに揺らしながら、月光がそれに反射して輝くのをぼんやりと見つめる。

少しだけ、見惚れる。

きらきらと光りを反射するその様は、とても綺麗だと思つたから。けれど、あたしの思考はゆらゆらと違うところばかりを迷う。

『私のフィオナ』

想うのは、以前、あたしをそう呼んだ一人の男性のことばかり。穏やかで優しい声が、口調が、まだあたしの中に残つていて。

名前も知らない人だつた。

彼は自分のことは何一つ語らつとはせず、あたしに純白の薔薇の花を一輪渡して、去つていった。

それは『フィオナ』という名前の清らかな花。

花瓶に活けて毎日水を変えてはいるけれど、少しずつ、萎れてきている。あたしはその真っ白な花に、少しだけ見惚れる。あの人の姿を思い出すから。

彼は、あたしのことを“マリア”と呼ばなかつた唯一の人。
……本当に、美しい人だつた。

絹糸のように柔らかで艶やかな髪も、わずかに憂いを帯びた瞳も、まるで月の色を塗つたかのような鮮やかな金色。優しく微笑む形の良い唇に、柳の眉。細身で、けれど均整のとれた逞しい肢体にこの国の黒い軍服を纏つていた。

あたしは彼の名前が知りたかつた。

けれど、城内に居る兵士たちに聞いても、両親や大臣たちに聞いても、誰に聞いても彼の名前を知る者は居なかつた。けれど、まさかルンペルシュテイルツヒエンじやあるまいし。そう思つて、あたしはもっと色々な人に、たくさんの人聞いて回つた。

それでもやっぱり、彼の名前を知る者は誰一人として居なかつた。

……いや、何人か知っているのだろうと思わせるような人も数名は居たが、誰も教えてはくれなかつた。知りません、お答えできません、申し訳ありませんとそればかり。

だから、あたしは考えた。彼に相応しい、素敵な名前は無いものだろうか、と。そして思い付く限りのたくさんの名前を考えた。

けれど、無理だつた。

どんなに一生懸命に考えても、どんなに沢山の名前を考えても、どの名前も彼の雰囲気とはどこか違つていた。相応しくないようを感じた。あの物憂げで優しい瞳には、どんな名前も似合わないような氣さえしてきた。それで結局、あたしは彼のことを『の方』と呼ぶことにした。

あたしに、美しい薔薇の名前をくれたの方。
あたしは、の方に相応しい名前を知らない。

……あの日から、一体どれだけの時が過ぎただろうか。

あれから、もう二年だ。

あの薔薇はもう随分と前にすっかり枯れ落ちてしまった。当時十五歳だったあたしは十八歳になり、成人を向かえていた。最近では、お父様があたしの婚約者を探し始めている。見ず知らずの方との結婚なんて、あたしは少しも望んでなどいないのに。出来るなら、愛しい人と。分かりあえる人と共に生きたい。運命のように引かれあう人。きっと、それはの方だ。初めて出会つた時のあの胸の高鳴り。そして、他人とは思えない安心感。これが運命と言うものなのだと、あたしは心から思ったのだ。

ああ、日一日と時は確実にすぎ去つていいく。夏がそろそろ終盤に差し掛かり、秋が訪れようとしている。冷たい風が地上を這い、虫たちは歌い始めた。わずかに色付き始めた木々に、あたしはほう、と溜め息を吐く。

……の方は、一体誰なのだろうか。何故あたしの前に現れたの

だろうか。たつた一度のあの出会い。あれには、一体どんな意味があつたのだろう。

夜は、今日も煩く鳴いている。

三年も前の出会いが、あたしの思考をかき乱す。

風の舞いも、虫の歌も、今はもう愛でている余裕なんて無い。あの方の姿だけが、あたしの脳裏を騒がす。

彼に逢いたい。

想うのは、そればかり。あたしが想うのは、名前も知らない一人の男性のことばかり。あの日以来、彼はあたしに逢いに来てくれるていないけれど、日に日に、あの方を思つている時間が長くなつてきているような気がする。毎日あの方を想い、今は亡き真白な薔薇の花を懐かしく思つ。

名前も、年齢も、何一つ分からぬ不思議な人だけ、この想いは止められない。あの方への想いは日に日に大きくなるばかり。

あたしは今日も、あの方を想つていて。

あたしはまた一つ、溜め息を吐いた。

コンコン。

にわかに、扉を叩く音がした。

「誰？　ミリア？」

あたしは特に親しくしている使用人の名前を呼んだ。ミリアは、よくあたしの話し相手になつてくれるから。

「　私です」

扉の向こうからの、男性の声。良く知つた人のものではない声に、あたしは一瞬動きを止めた。けれど、その響きの懐かしさに、胸が高鳴る。

心地よく響く、低い声。

穏やかで優しいこの声、口調。ああ、なんて懐かしい。これは運命の音色だ。

「今晚は、私のフィオナ」

ずっと待ち侘びていた、あの方の声。『フィオナ』と、あたしを

呼ぶのは彼以外にはいないのだ。やはり彼は、あたしの運命のひと…

「今つ、開けるから！」

勢い込んで、あたしは扉の方へと駆けて行った。扉を開け、その人の姿が目に入ると、自然と笑みが零れる。彼はその場にひざまずき、あたしの右手の甲に口付けをした。そしてあたしに真白な『フイオナ』を一輪差出し、口許に柔らかな笑みを浮かべる。

「ご無沙汰しておりました」

その微笑みを、あたしは見つめる。

「……貴方は、誰なの？」

「この国の軍を束ねている者です」

彼の声は穏やかにだ。けれど真実を隠し、曖昧に誤魔化そうとしているような返答に、あたしはわずかに目を細めた。違う。あたしが知りたいのは、そんなことじやないのに。

「貴方の名前を教えて？」

「どれをお教えしましょつか」

彼は少しふざけたように、くつりと笑った。

「この髪と瞳の色から“月”^{ルナ}と呼ぶ者、戦場での私を見て“^{ブランドハウンド}獵犬”

だの“狼”^{ウルフ}だのと呼ぶ者もいますね。他にも、幾つもの名を持つております

「……あたしは、あなたのことを行べば良いの？」

あたしは彼の頬にそつと触れる。

すらりと伸びたその長身は、優に百八十を超えるだろう。あたしは高い位置にある月色の双眸を見上げ、覗きこんだ。彼はやはり、柔らかな笑みを浮かべている。

「お好きなよう」

その言葉に、あたしはうつむく。

「……貴方に似合つ名前が思いつかなかつたの。貴方には、どれも相応しくないような気がして」

彼は少しだけ目を細めると、あたしの頬に口付けをした。まるで鳥のつけばみみたいな優しい口付け。拒むことはしなかつた。彼は、

寂しげに笑う。そして窓の外を見つめ、今日の月はとても美しいですと呟いた。

「私はもう、帰ります。あまり長居をしては、気付かれてしまう」
「誰に、とか。どうして、とか。聞きたい事は沢山あった。けれど、どこか悲しげな彼の横顔を見つめていると何もきけなくなつた。けれど寂しくて、愛しくて、だからひとつだけ、我儘を聞いて欲しくて問いかける。

「もう、帰つてしまふの？」

彼は、ウルフ静かに頷く。

「月夜に狼を部屋に招き入れても危ないだけですよ

「あたしの質問に、答えてはくれないの？」

「……申し訳、ありません」

そう言って、彼はあたしに背を向けて取っ手に手を掛けた。行かないで、と叫びたかった。ぴしりと伸びた背中に、抱きつきたかった。

「さよなら、マリア王女」

「待つて！」

彼の背中に、あたしは声をなげる。

振り返ることはせず、かれはひたと動きを止めた。

「何でしちう

彼の背中に、あたしは願う。

「……あたし、『フイオナ』が良い」

マリアなんて、呼はないで。貴方だけは、貴方だけの名で呼んで欲しい。“フイオナ”という、美しい名前。どうかどうか、お願ひだから。

願えば、彼は頷いてくれた。

「さよなら、フイオナ」

「……さよなら」

ぱたん、と悲しい別れの音。

あたしは静まった扉に力なく手を振った。

『フィオナ』

この名前は、好き。

の方があたしにくれた、の方だけが持つあたしの名前。 いと
しい人がくれた、特別の名前。

純白の、清らかな花。

夜の闇に映える鮮やかな白。

清く美しい、薔薇の花。

『マリア』

この名前は、嫌い。

誰もが美しい名前だ、閑雅な名前だと贅美する。 だけど、それは
あたしの地位に送られたもので、この国の“王女”に送られたもの
だ。

掃いて捨てるほど貰つた言葉。
こんなもの、あたしはいらない。

の方だけは、何も言わなかつた。

それが、とても嬉しかつた。

けれどの方は、自分のことすらも、自分の名前すらも言おうと
はしなかつた。

それが、とても切なかつた。

まるで貝みたに口を閉ざした貴方。

貴方は、一体誰なの？

・

あれから、一ヶ月が過ぎた。

あたしはあの時と同じよう、万年筆を揺らしながら机に向かい、

あの方が訪れるのを待っていた。ゆらゆらと揺らすたびに、万年筆の柄がきらきらとわずかに光る。今日も、月が明るい。きらきらと、月は詠う。

あの優しい声に触れることができれば……。

想うのはそればかり。

あの方から貰ったフィオナは今日も机の片隅で咲いている。もうすっかり萎れてしまつたけれど、未だに飾つている。

……愛しい。

あの方が、誰よりも愛しい。苦しいくらい。

あたしは萎れたフィオナに口付けをした。微かな香りが鼻孔をくすぐり、花びらが一枚零れ落ちる。

ああ、あの方は、まだどうか。

今日も、あたしに逢いに来てくれるのだろうか。窓から空を覗けば、月はきらきらと詠つていた。星はふわふわとまどろみ、鳥達は羽音を響かせていた。

……良い夜だ。

月が明るい分、闇が濃い。こういう夜は、森がざわめく。なぜかは知らないけれど、いつもより少し浮き足立つ。

あたしは月を見上げた。

完璧に満ちた金色の月に、あの方の瞳を思い出す。

「……逢いたいなあ

」こういう夜は尚更、あの方を思い出す。

「誰に逢いたいのです？ 私のフィオナ」

わずかに、扉の軋む音。それとほぼ同時に聞こえてきた声に、あたしは振りかえり笑顔を向ける。

「こんばんは」

あたしはぱたぱたと彼に駆け寄り、その手を取つた。はしたないかとも思つたけれど、今のあたしにはもう抑えられないし止められない。あたしはその術を知らないから。

「ずっと、ずう一つと貴方のこと待つていたの。一ヶ月前に逢つ

たばかりなのに、もう何年何年も、長い間逢つていなかつたみたいで、寂しくて……、とても、逢いたかった」

「フィオナ……」

呟くと、彼はあたしの髪をそつと撫でた。その穏やかで優しい手付きや額にそつと触れる体温が気持ちよくて、あたしはわずかに目を細める。

ややあって、彼は静かに口を開いた。

「……近いうちに、私はここから出て行きます。今日は、最後の御挨拶に伺いました」

「え？」

一瞬、思考が停止した。

「あの、それは、どういつ、こと……？」

「私は大罪を犯しました。もう、ここには居られません」

「ダイザイ……？」

「私は、罪人です」

泣きそうに歪んだ表情。目が、離せなかつた。

その表情を隠すように彼はあたしを抱き寄せた。

彼の胸は、腕は大きくて、暖かかつた。

「……けれど、貴方が愛しい。誰よりも、何よりも貴方が恋しい。

フィオナ、貴方と離れたくない」

「……あ」

彼の名前を呼ばうとして、あたしは止まる。

貴方の名前を、貴方に相応しい名前をあたしは知らない。

「貴方を愛しています。貴方が愛しい。それ故に、私は貴方が欲しいのです。貴方の傍らを離れたくない。その髪の一本一本から指の先まで、余すところなく貴方が欲しい。……狂おしいほどに、私は貴方が欲しいのです」

彼はあたしを抱きしめながらそう言った。

強く、強く、動けないくらい強く、喋られないくらい強く、あたしを抱きしめて。貴方はあたしの肩に顔を埋めて、あたしにしか聞

こえないように言った。それはまるで、小さな鳥のさえずりみたいに。優しい色合いの黄金の髪が、優しく言葉を紡ぐ唇が、静かに光る月の瞳が、貴方の全てが、あたしを捕らえる。

貴方の存在は、まるで小さな花びらを包み込むみたいに優しい。けれど、貴方は絶対的な欲望を持つてあたしを捕らえる。

……逃れられない。

「貴方が欲しい」

静かな情熱を秘めたその言葉が、あたしを縛る。貴方は自身の欲望を曝けだす。たつた一言。貴方の紡ぐその短い言葉が、あたしを縛り、捕らえる。

あたしは息が詰まってしまって、何も応えることが出来ずにただただ彼の腕の中に立ち尽くしていた。

「……フィオナ」

彼は呟く。

それは、貴方があたしにくれた、あたしの名前。

貴方があたしにくれた、美しい薔薇の名前。

けれど、あたしは貴方の名前を知らない。

貴方に名前をあげることすら叶わなかつた。

『どれをお教えしましょうか』

前に逢つた時、貴方はそう言つて笑つていた。優しく、穏やかに、そしてわずかな憂いを帶びて。ただ静かに、微笑んでいた。ぱた、と首筋に何か冷たいものが零れた。

……涙？

泣いて、いるの？

「私と共に、来てはくれませんか……？」

涙に霞んだ声。

子供みたいに、貴方は肩を震わせて言つ。行けば危ない。

何をしたのかは知らないけれど、大罪を犯したという人と共に居れば、あたしも追われることになるだろう。そしておそらく、彼に

は“王女の誘拐”といつ罪まで背負わせることになってしまっただ
ら。

きっと、いや、確實に彼もそれは理解しているはずだ。それでも、貴方はあたしに着いて来て欲しいと言つ。あたしが愛しいと。すべてを、自分のものにしたいのだと。彼はわずかな狂気を持つて、あたしを求めていた。

それでも、あたしは

「教えて？」

「え？」

あたしは、知りたいの。
貴方のことを、もっと。
知りたいの。

「名前、を。貴方の、本当の名前を」
彼は、あたしを抱く腕に力を込める。

「…………… フード」

やつと、教えてくれた。貴方の名前。

“フード”

異国の言葉だ。意味は確か、『運命』だつただろうか。

「フード」

彼の腕の中で、その名前を一度呟いた。

貴方に相応しい名前だと、心から思う。

「…………… はい」

これが、あたしの答えだ。

「あたしは、貴方と共に。……永遠に」

貴方を愛しています。

誰よりも何よりも貴方が愛しい。いつまでも、貴方と共に居たい。
貴方の運命を、共に歩みたい。あたし達はきっと、人には見えぬ運命の糸でつながっているのだ。それに、あたしも貴方が欲しい。余すところなく、全てが欲しいの。

本当に、狂おしい程に。

あたしは豪奢なドレスを脱ぎ捨てて簡素な旅装に身を包んだ。

そして必要最低限の荷物だけを持ち、ファードと共に一頭の馬の背に跨った。もつとも、その荷物も後で捨ててしまうのだけど。いつまでも持つていたら、その荷物から身元が分かつてしまふことがあるらしいから。

完全な静寂を守る、城を囲うように造られた森。その中に、馬の駆ける音だけがやたらと大きく響く。

美しい葦毛の駿馬で、人を一人も乗せているにも関わらずそれを感じさせないくらい軽やかに走っていた。

「ねえファード」

あたしはファードの体に腕を回した格好のまま、少しだけ顔を上げて先刻聞いたばかりの彼の名前を呼んだ。

「何でしようか

「貴方は……あたし達は、どこに向かっているの？」

「遠く、です」

少しだけ間を置いて、ファードは無感動にそう答える。あたしは口を閉ざす。何故だか、もう何も聞いてはいけないような気がしたから。

本当は、もつと違うことを聞きたかったのだけど。

『貴方は一体、どんな罪を犯してしまったの？』

聞きたかった。貴方の罪を。

けれど、口から出て来たのはあの質問。意氣地が無いなあと、あたしはちょっとだけ眉をひそめる。

それでも、あたしは大丈夫だと自分に言い聞かせる。

大丈夫。

そのうちに、貴方から話してくれる信じているから。

大丈夫。

もう一度心の中で呟いて、あたしは目を閉じた。彼の背に頬をすり寄せ、そしてその態勢のまま、違うことを考え始める。少しやり過ぎたかしら。

風は、ふわりともいわない。

木々は、かさりともいわない。

星は、きらりともいわない。

何もかも全てがだんまりを決め込んだように、いつそ不自然にも感じるほどに辺りはひっそりと静まり返っている。これからしばらくなの一間、この森からは全ての音が消え去るだろう。全ての生き物がなりを顰め、息を顰める事だろう。

あたしは、魔女の血を受け継いでいる。

あたしの生まれる五十年前、『魔女狩り』というものがあったのだという。陰の気を持つ女、周りの者達とは明らかに異質な女、それから、魔の力を使う女を手当たり次第に捕らえ、散々拷問をした挙句に十字架に掛けて火あぶりにするという残酷なもの。国に仇なす魔の者を根絶やしにしようとしたらしい。まじない師や、占い師。ちょっとした奇術を生業とする者まで、妖しいと思われる者は全てがその対象となつた。

この魔女狩りは曾祖父の代に始まつたのだが、あたしの祖母当時最も恐れられていた魔女の娘 に惚れ込んだ祖父によって廃止された。その魔女の孫娘であるあたしも、当然のことながらその血を引いている。

そして今では、魔女達による魔術部隊までもが作られている。スマーラージが『武の国』と呼ばれ、恐れられている最大の理由は、その魔術部隊の存在と功績によるものだ。もっとも、あたしは魔法を使うことも空を飛ぶことも出来ないが。

あたしに出来ることは、動植物との会話。それだけ。それ以上の力は一切無い。だけど、これはある意味最も有効で、そして強い魔

法なのではないかとあたしは思っている。

人間は自然には勝てないのだ。対策を講じることは出来ても、打ち勝つことは出来ない。

あたしは自然その物に語りかけ、場合によつては見方にも付けることが出来る。この力は、多分何よりも有利にはたらくだろ。

たとえば、今日のような日には特に。

彼もきっと気付いてはいないだろ。この地面を蹴る蹄の音があたし達にしか聞こえてはいないことにも、この馬の蹄の跡が地面に付く側から消えているということにも。

全では、あたしと約束してくれたから。出発の間際、あたしは全てのものに語りかけた。城を囲うこの森は承諾してくれた。

自然是嘘を吐かない。

全では、承諾してくれた。

あたしが城を飛び出したことはまだ誰にも知られていないはずだ。明日の朝、使用人が起こしに来たときにあたしがいないことに気が付く。窓が開け放たれていて、そして軍隊隊長の姿も何処にも見当たらない。

その人は、罪人。

追いかけようと兵を送り出すが、足跡すら見つからない。あたし達は逃げ切り、そしていつか、貴方はどんな罪を犯してしまったのかを教えてくれる。

うまく、終わらせる。いや、終わらせてみせる。

彼の胸に安らぎと平穏を捧げる為に。その為なら、あたしはこの力を使い続ける。

あたし達は、自然を見方に付けているのだ。

.

静か過ぎる気がする。

何故だらうか、星の瞬きすら消えてしまったようにも思つ。

守らなければ。

私の後ろにいる、愛しい人。危険だと分かっているにも関わらず、私に付いて来てくれた女性。私の体に回しているこの細い腕は、華奢な体は、あまりにも無力だ。

守らなければならぬ。

それはこの女性を、この国の王女を連れ出してきた私の義務であり、そして使命だ。フィオナには、一片の不安も与えてはならない。いや、きっともう、並々ならぬ膨大な不安を抱えているだろう。それでも、私に着いて来てくれた。

たつた三度。

私達がきちんと顔を合わせたのはたつたの三度しかないのだ。私を不信に思わないほうがおかしいのではないだろうか。それでも、そんな状況でも、彼女は真っ直ぐに私を見つめ、疑うことなく着いて来てくれた。そして、私を信じてくれた。

彼女は『マリア』ではなく『フィオナ』が良いと、そう言つてくれた。

だから、守らなければ。

私は、何を犠牲にしてもフィオナを守らなければならぬのだ。

「ファード

「はい

不意に、後ろから優しい声がした。

「……大好きよ」

その言葉に、思わず涙ぐむ。

「はい……っ！」

「ファード

あたしは彼の名を呼んだ。何だか少し、思いつめていたようだつたから。彼は紳士的に「はい」と短く答えた。

・

「……大好きよ」

彼はまた、「はい」と答えた。少しだけ、掠れた声だった。さあつと視界が開け、森を抜けた。ゆるりと、あたしは顔を上げる。空が、白み始めていた。

「夜明けだね」

彼は、無言で頷く。

ちょっとだけ、笑った気がした。

「……キレイ」

薄紅い、わずかに紫掛かった空。眩しくて、鮮やかで、本当に綺麗で、まるであたし達を祝福してくれているかのようだった。

城下町を抜け、私たちは山間の小さな村に入った。

この国、スワラージは活気があり賑やかだと言われているが、それはほとんどが大きな町に入ればの話だ。小さな村に入ってしまえば人口も少なくなり、閑散として少し寂れたような感じすらする。

「ねえ、ファード」

朝方、そろそろ疲れただろうか、とフィオナの体温を感じながら宿を探していた。馬も少し休ませなければいけないから、厩のついた宿がいいか、などと考えていると、不意に後ろから声が掛かった。

「何でしょう、フィオナ」

ちらちらと、静かに雪が降り出してきた。それが余計に、人気のないこの村の寂しさを引き立たせる。

「この馬、名前はないの？」さつきから聞いているんだけど、分からぬって言うの。ファードもこの馬のこと“お前”とか“コイツ”ってしか呼ばないし

馬と会話をしているかのようなその言い方にわずかに首を傾げながら、ああ、と私は呟いた。

「私達軍人は、馬に名前を付けたりしないんですよ」

その言葉に、え?と私の腰に回す腕に力が入る。

「どうして? 名前がないなんて、名前で呼んでもらえないなんて、そんなの寂しいじゃない。可哀想よ」

私は馬の毛並みを撫でながら答えた。柔らかく、滑らかな毛並み。心地よい体温。彼は長く共に闘つてきた戦友で、相棒だ。きっと、こいつがいなければ戦場であそこまでの活躍は出来なかつただろう。

「私達軍人は戦場で戦います。そのとき、馬が傷を負つて動けなく

なつたりした場合、やむを得ずその場に置いていかなければならぬ。時には自分の身を守るためにおどりにする事もある。……どつちこしる、見殺しにすることになります」

「ファードは言葉を切り、自嘲するよつて笑つた。

「けれどそのとき一瞬でも躊躇えば、いつちが命を落とすことがあります。たとえほんのわずかな時間であつても命に関わる。躊躇つてはいけない。だから、私達軍人は自分の馬に名前を付けないんです。

……名前を付けてしまつては、情が移つてしましますから」

「ふうん」

少し、悲しげな声。

「……貴方が、付けますか?」

「え?」

「名前です。ここに、名前を付けてやつてください。……もう、これからは戦場に立つことは無いでしょ? から」

「いいの?」

驚いたようにフィオナは言った。

「ええ。ここにひとつたりで、どびきつ縁起の良いものをお願いします」

小さな宿屋を見つけ、私はそちらに目を向けながら言った。

「それじゃあ“セレンダイン”が良いわ!」

うーん、としばし悩んで、フィオナは言った。明るく弾んだ声だ。きつと私の後ろで満面の笑みを浮べてゐるのだろう。その顔を見ることが出来ないのが残念でならない。

「セレンダイン? ……ああ、金鳳花、ですか?」

「そう! ねえファード、金鳳花の花言葉つて知つてる?」

「……いえ」

「あのね、とフィオナは少しもつたいぶつたよつて言つて。

「“来るべき喜び”つていうの!」

「来るべき、喜び。

「……セレンダイン。うん、すくく良いわ。ねえファード、あたし

“セレンダイン”がいい！」

“来るべき喜び”、か。良い名前だ」

「ほんと？ やつたあ！」

楽しげに、フィオナは笑う。

「これから宜しくね、セレンダイン」

楽しげに、フィオナはころころと笑っていた。“セレンダイン”も一つ、嬉しそうにいなないた。

2

ちらり。

ちらりとひとつ、雪が落ちた。

雪が城壁に黒い染みを残し、消える。

ちらり、ちらり。

何かを弄ぶように冷たく、何処か、意地悪く。

雪はちらちらと空を舞う。

「え？」

王女の部屋に入った使用人は、小さく声を上げた。

いつも通りの一日を迎えると、そう思っていた。先日、私はマリア様の付き人に任じられ、そのことに誇りを感じていた。マリア様はただの使用人でしかない私に気安く声を掛けてくださった。私は、マリア様を心から慕っていた。

初雪だ。

いつもより、少し早く降り出した雪。マリア様もきっとお喜びになるだろう。だから、今日も一日頑張ろう。そう思っていたのに、マリア様を起こしに行くと、その部屋は蛇の殻だった。

残されているのは寝台に括りつけられた太いロープ。そしてそれを外に吐き出す、嘲笑うかのように開け放たれた窓。

置き手紙も何も無い。

本当に、ただそれだけだつた。

ひらひらと、ビロードのカーテンが重たく風になびく。冬の初めの冷たい風が私の頬を撫で、髪を弄ぶ。終わつたと、そう思つた。

その日のうちに会議が行われた。

マリア王女と、軍隊隊長の二人の失踪について。

駆け落ちだらうという結論にいたつた。

『駆け落ち』

使い古された言葉だ。

こんな、古典的な恋愛小説にしか使われない言葉だと思つていだ。なんて口マンチックなんだろうなんて話になるはずもなく、速やかに一人の搜索が開始された。

前国王の妃、ベアトリクス様の反対を押し切つて。

・

その日の夜、私はベアトリクス様の部屋を訪ねた。

「ベアトリクス様、どうして二人の搜索に反対なさつたんですか?」

ベアトリクス様はクスクスと楽しげに笑う。不思議なくらい、この国の王族の女性は気安い方が多い。

以前お茶を溢してしまつた時、ベアトリクス様はいいのよと笑つて、自ら床を拭いていた。私がやりますからと説得するのが大変だつたほどだ。そういえ、ベアトリクス様は農民の出だと聞いたことがある。その所為だらうか。

「そんなに怒らないでちょうどいい、ミリア。眉間の皺は癖になる

わよ？」

「茶化さないで下さい」

つんと眉間を突付かれ、私は更に不機嫌な表情をする。力チャヤリ、と小さな音を立ててベアトリクス様は窓を開いた。ふんわりと、静かな風がカーテンを揺らす。

……ぞつとした。

外からの音が一切無いのだ。

風はある。

けれど葉擦れの音も動物の鳴き声も何もない。本来あるはずの音が、何一つ聞こえてこないのだ。

何だか不気味で、ぞつとした。

「ベアトリクス様、答えてください」

「ほら、あの子には母親が居ないでしょう？……マリアがまだ幼い頃に、死んでしまったから。

私ね、マリアには誰よりも、どんな人よりも幸せになつて欲しいのよ。……ううん、幸せになる権利があると思うの。あのままじや、可哀そうじやない」

あれじやまるで“お人形”だわ、とベアトリクス様は笑つた。お人形のように大切にされているのなら良いではないか、と私は思う。

「あの子達の幸せを願うなら追つてはいけない。だから、反対した。それだけよ」

これが、ベアトリクス様の答えだった。

どこか違和感がある言葉。

なんだか噛み合つていらないような気がする。

おそらく、私は変な顔をしていたのだろう。訳が分からない、とも言つよつた。ベアトリクス様は、まるで小さな子供にするように私の頭をくしゃくしゃと撫で回した。そして全てを見透かしていような、どこか意味ありげな表情をする。

……本当に、不思議な方だ。

「大丈夫よ。彼も、マリアに手は出さないはずだから。……だって、
彼は知っているんだもの」
何を、とは聞けない。

聞いてはいけない。

そんな空気。

その空気_ADDRESS_に圧されて、私はベアトリクス様の金色の瞳を見つめた。

……マリア様と同じ色の瞳。

ベアトリクス様はまたにこりとして、窓の外を眺めた。長い黒髪が、風にふんわりと揺れる。

「彼だって愛しい人を、心から惚れた人を罪人の妻にしようとはしないはずよ。愛しい人に自分の罪を背負わせることなんかできないもの。たとえマリアが、それをどんなに強く望んだとしてもね」

「……ベアトリクス、様？」

少し寂しげに、そして、少し悲しげにベアトリクス様は窓から顔を出して、白い息を吐き出した。

「……何も知らないのは、あの子だけ」

そう言って、空を仰ぎ見るベアトリクス様はとても綺麗で、そして可憐に見えた。もう既に還暦を超えているとは思えないほど、美しい。

ああ、そう言えば、

軍隊隊長も綺麗な金色の瞳をしていた気がする。

ベアトリクス様の横顔に、私はぼんやりとそんなことを思つていた。

た。

「なつ、フィオナ！？」

ファードはわたしを見るなり目を見開いて声を上げた。

「まあ失礼ね、人の顔を見るなり大きな声を出したりなんかして」

小ちな、お世辞にも綺麗とは言えない宿の一室。あたしは自分の髪を一房抓み、クスクスと笑つた。

ファードが買い物に行つてゐる間にやつたのだ。まあいいこいつ反応だらうなといふのはなんとなく想像してゐた。

「ジロー（一）かテラ（二）か、あたしはどうちなかしらね。でもまあどちらも贅者には変わりないわ。それとも、あたしは愚か者のアン（三）かしら？」

腰まであつた長い髪は、肩口までに短く切りそろえた。頭を左右に振つてみると、毛先がぱさぱさと顔に当たつた。

「す」「ぐ頭が軽いわ。これ、自分で切つたのよ。どう？ 初めてにしてはなかなかうまいと思わない？」

「そんな……、どうして？」

ファードはあたしの髪に触れ、呟く。

あたしはスプリングの弱くなつたベッドに腰を降ろし、髪を首の後ろで一つにまとめながら答えた。ベッドが、ぎこ、と小さく音を立てた。

「あたしは國民に知られ過ぎてゐるから。ほら、この髪つて目立つでしょ？ それに、國民の中では“王女は長い黒髪”つて定着してゐると思うのよ。だから、この髪だけでもなんとか出来ないものかしらーつて思つて。それで切つたの。おかみさんに鋏を借りてね。

式典とかの度にパーティーに参加させられるんだもの。あれつて正直、すじく面倒なのよね」

お父様は成金趣味だから、と続けよつとしたとき、不意にファードはあたしを抱きしめた。

「……すまない、私の為に」

「大丈夫よ、あたしの髪、伸びるの早いんだから。そのうちまた元の長さに戻るわよ。それには、これは貴方の為じゃなくて、あたしの為なのよ。あたし、一度でいいから髪を短くしてみたかったの。……それとも、髪の長いあたしじゃなきや嫌？ 髪の短いあたしは

嫌い？」

「そんなことは無いが、しかし……」

あたしはファードににっこりと笑いかけ、続ける。

「それなら何の問題もないわ。やだ、そんな顔しないでよ。ねえファード、貴方に着いて行くつて決めたのはあたしなのよ？ あたしは自分で、貴方と生きていくつて決めたの。誰かに言われて仕方なく着いて来たわけじゃないの。これくらいのこと、何でも無いわ。そんなことより、これから予定を決めちゃいましょうよ。明日にはまた出発するんだし、ともかくにもまずは逃げ切らなくちゃ始まらないもの」

「そう、ですね」

ファードはあたしから一歩離れると、口許に申し訳なさそうな笑みを浮べた。

「それからね、ファード」

「何でしちゃうか」

あたしはファードの襟首を掴んで力任せに引き寄せ、視線の位置を同じにする。そして金の瞳を強く見つめた。

「そういうの、止めよう、そういう堅苦しい喋り方するの、止めて欲しい。それからね、『王女だから』とか『女だから』っていう遠慮もこれからは一切無用よ。城を飛び出した時点で、あたしは『王女』という地位を放棄しているの。あそこから逃げ出した以上、あたしはもう王女ではないの。それに、『王女、王女』ってペコペコされるのはもう嫌で、もう本当にうんざりしているの。鬱陶しくつて。お願いだから普通にして。

あたしはね、対等の立場の人間として扱って欲しいの。足手まといになるような事はしないし、そななるような事があれば捨て置いて行ってくれても構わない」

ファードに出会って、あたしは初めて自分で選択することを求められた。自分の意見をはつきりと言える場を与えられた。今ここで、ファードの意のままに動くお人形にはなりたくない。あたしは、変わ

りたい。もう“お人形”に戻りたくない。

“対等の”人間として扱われないのなら、あたしは、ファードと一緒にには居られない。どんなに愛されていたとしても、それだけは譲れない。……お願いだから、どうか、貴方まであたしをお人形にはしないで。

あたしはファードの襟首から手を離し、もう一度その瞳を覗きこんだ。

「……分かりました」

「だからっ！」

もう一度襟首を掴んでやるうと手を伸ばすと、ファードはそれをひらりとかわし、クスクスと悪戯っぽく笑い出した。

「ファード？」

「分かったよ。ほら、これで良いんだろ？」

そう言って、あたしの頬に口付けをする。

……なんでだろう。

何だか、変に照れる。急に口調が変わったからかもしれない。初めてつて訳じやないのに、頬が熱くなつたような気がした。ファードに背を向け、頬に両手を当てるみると、本当に少し熱くなつていた。「ほら、これからのお預けを決めるんだろ？　さつき町で地図とか入り用な物を買つてきたんだ」

ファードは朗らかに笑い、机に地図を広げてあたしに手招きをした。

・

「あたしはね、対等の立場の人間として扱つて欲しいの」

そう言って、真摯な瞳で私を真つ直ぐに見つめてくるフィオナに、私は少なからず驚いた。そして、続いた言葉にも。『足手まといになるような事はしないし、そななるような事があれば捨て置いて行ってくれても構わない』。まさかフィオナの口からそのような台詞が出てくるとは思わなかつた。

……ずっと、見つめていたのだ。

三年も前から、ずっと。

だから私はフィオナのことはある程度把握しているつもりでいた。確かに、芯の強い娘だとは思っていた。とはいって、父親や祖父母、大臣達や使用人達にそれは大事にされ、蝶よ花よと育てられてきたお姫様だ。まさかこれほどまでだとは思わなかつた。もしかしたら、どこかで差別していたのかも知れない。フィオナは、“女”で、そして“王女”だから、と。

私の襟首から手を離し、じつと顔を覗きこんでくるフィオナを見て、何故だか少し意地の悪いことをしてやりたくなつた。

……やつ当たり、なのかも知れない。自分の知らない一面を見せられた事に対する、やつ当たり。私はいつからこんなに子供っぽい人間になつてしまつたのだろうか。心から好いている相手を正確に理解できていなかつた、ということに対する自己嫌悪。そして、罪悪感。

それをその相手にぶつけてしまうなんて、今の私は酷く子供じみている。

全く、以前の私からは想像も出来ない。

「……分かりました」

「だからっ！」

大人気の無い行為だと分かつてはいるのだが、思わずやつてしまつた。こうなつたらもう後には引けないので、調子に乗つてみるとした。

「分かつたよ。ほら、これで良いんだろ？」

フィオナの頸に手を掛けて持ち上げ、その頸に口付けをした。気障な行為だと分かつてはいるのだが……まあ良いだろ？

フィオナはもともと上気していた頸を更に紅く染めて私に背を向けると、それを隠すように頸に両手を当てた。その姿がやけに可愛らしく見えて、私は思わずクスリと笑いを漏らした。

頸への口付けは以前にもしたことがあるはずだが、そのときはもつ

と平然としていたように思う。不思議だ。

「ほら、これからのお予定をきめるんだろ？　さつき町で地図とか入り用な物を買つてきたんだ」

机に地図を広げ、フィオナに手招きをすると、フィオナは振り向いてにつこりと笑顔を向けてきた。私は慌てて緩みきつた口許を隠す。

……敵わない。

私はこの笑顔に惚れたのだと再認識した。

本当に、フィオナには敵わない。

そう思いながら、私はフィオナに気付かれな「ようにそつと溜め息を吐いた。

……あの事さえなれば、と私は思う。

それこそが私の最大の悩みであり、そして最大の罪だ。それさえなれば、と私は変えようのない事実に歯噛みする。

あのことは……、あのことだけは絶対に気付かれてはならない。私はもう一つ、フィオナに気付かれない様に溜め息を吐いた。フィオナ。貴方といる限り、私の罪は永遠に終わらない。

私は、終わりようのない罪を背負つている。

フィオナ。

私は、お前の

：

第一章 雪にまぎれて（後書き）

ここに注釈を…

1ジヨー…若草物語の登場人物。家計の為自慢の髪を切り、お金に換えた。

2デラ…賢者の贈りものの登場人物。恋人へのクリスマスプレゼントを買うために自慢の髪を切り、お金に換えた。

3アン…赤毛のアンの登場人物。髪を染めるのに失敗してしまい、長かつた髪を切り落とした。

第三章 月の光と罪の名前（前書き）

一人の過去のお話

あたしは、白い百合の花が嫌い。大嫌いだ。多分、世界で一番嫌いな花。

あの花は、マリアという名の聖人の象徴だから。

……お父様は、よく言つていた。

『これは、お前の花だ』

……だから、あの花は大嫌いだ。

そして何より、“マリア”という自分自身が心の底から氣に食わなかつた。預言者を産んだというあの女性の名が、氣に入らなかつた。

この“マリア”と書いた名が、いや、“マリア”という自分自身を、私は何よりも嫌つていた。早く、死んでしまえば良いのだと思つくらい。

緩慢な歩みの死が、ゆるゆると、いつまでも来ない死が、疎ましかつた。

「早く、来ないかなあ」

あたしは何度、この台詞を吐いたどうつか。

・

あたしが十四歳のとき、国内外で戦争が頻発していたらしい。

『らしい』と言つのは、その全てがあたしの知らないところで起きたことだつたから。まるで隠しをされたみたいで、あたしにはその実態を知ることを一切許されていなかつたから。国の威信を賭け

た戦いだとお父様は言つていたけれど、その内容があたしに語られる事はなかつた。

けれど、あたしは知らうとした。

木々のざわつきに耳を傾け、使用人達に話をせがんだ。そして、あたしは初めてお父様に『お願い』をした。

「ねえお父様、今國中で戦争が起きているのでしょうか？ それに、使用人達の話によると今ではもう女性も参加しなければいけない程だとか。お父様、あたしも戦いに行きます。お願いです、行かせてください」

これが、あたしが産まれて初めてしたお願いだった。

お父様は一考することもなく、ただ首を左右に振つた。

「何故です？」

あたしは問う。

「どうして、あたしは戦いに行つてはいけないのですか？」

この国の多くの人々が死地に向かつてているというのに、命を掛け戦場に立つてているのに、あたしだけがこのように城内で保護され安全に暮らしているのでは、国民に申し開きが出来ません。……あたしは、何もかも全てが自分の知らないところで行われていることに我慢がならないのです。……別に剣を持たなくても良い。弓を持たなくとも良いの。

あたしはただ、この國の為に戦つてくれている方々のお役に立つたいだけなのです。お願いですお父様。どうか、行かせてください」
お父様はやはり首を横に振つた。

そしてわずかに怒氣を帶びた瞳であたしを見ると、いつ言った。

「マリア、お前はこの國の世継ぎを産み、國を繁栄させなければならぬ身だ。戦地などという危険なところに遭る訳にはいかない。自身の役目を違えてはならん。もう少し、わきまえなさい」

「自ら志願したわけではなく、國の勝手な都合で『戦地などという危険なところ』に送り込まれた方達も居るのです。あたしは、その人達の助けになりたいのです」

「マリア」

低い声で言い、お父様はあたしの両肩に手を置いた。

「少し、わきまえなさい」

その言葉に、あたしは俯き、頷いた。

けれど、正直不服だった。

何故あたしは戦いに行つてはならないのだろうか。
何故あたしはこうして守られているのだろうか。

何故あたしはお父様の言いなりになつてているのだろうか。
そして何より、何故あたしはお父様に逆らえないのだろうか。

そう考えていて、あたしは自嘲じみた笑いを洩らした。

……嗚呼、まるで萎れた花みたいだ。

砂漠の真ん中で、明日を諦めてしまった花。

降る事のない雨を願いながら、しょんぼりと萎れてしまつた哀れ
で惨めな花。

お笑いだ、と思つ。

あたしは王女の身でありながら、国民の為に出来ることが何一つ
として無いのだ。まるでガラスケースの中に飾られたお人形みたい
世に出る術も世を知る術もなく、黙つてじつとしている」としかあ
たしには出来ないのか。

きつとお父様もこう思つてゐる。

『人形のように大人しくしていればいいのだ』と。

お父様はあたしには自我が無いとでも思つてゐるのだろうか。あ
たしは生きた人間で、自我だつてちゃんとある。もつ嫌だ。こんな
お人形みたいな、飾り物みたいな暮らしさもつうんざり。

“マリア”なんて聖人の名前なんか付けたりして、本当に馬鹿馬鹿
しい。

こんなの、あたしには一番似合わない名前だ。こんなことなら、
裏切り者の名前でもつけてくれれば良かつたのに。“マリア”なん

て呼ばれても、あたしに出来る事なんて、何もないのに。

……だけど、あたしは知りうとすることを止めなかつた。

お父様への、せめてもの反抗だ。あたしは今まで以上に色々なものに耳を澄ますよつになつた。自分で見ることが出来ないのならせめて、色々なことを聞いておきたい。その実情を、ほんの少しでも知つておきたい。

だから木々に、風に、星に、あたしは外の世界の話を聞いた。教えて欲しいと使用人達に話をせがんだ。貴方は知らなくても良いことですよと諭されたり、行き過ぎた好奇心は猫を殺すと言いますよとからかわれたりもした。けれど、それでもあたしは教えてくれと食い下がり、頼み込んだ。せめて事実を、教えて欲しいと。

どこの国と戦つているのか、どのような理由で戦いを始めたのか、どれだけの人達が死んでいったのか、どのようにして死んでいったのか。たくさん話を聞いた。酷く、惨たらしい話をたくさん、たくさん聞いた。

そうして、あたしは多くの「」とを知つた。多分、ほとんどの「」とを知ることが出来た。

……けれど、あたしの苛立ちがおさまることはなかつた。
一層、惨めだつた。

多くのことを知りながら何も出来ない「」とほど惨めな「」とはない。何もかもに、嫌気がさした。

今もたくさんの人々が死んでいっている。

切り裂かれ、大量の血液を散らし、痛み、苦しみの果てにいる。なのに、どうしてあたしはこんなにも安穏としているのだろうか。そう考えたとき、あたしは自分が「」にいる必要などないようと思つた。

戦場の只中にいる人達から巻き上げた税を使って生きる穀潰し。あたしはそんな生き方なんかしたくない。それならいつぞ、死んでしまつた方がいくらかましだ。そうすれば食い扶持が一つ減る。その分が他の誰かの口に入るのなら、その方が良いのではないだろう

か。

思いながらあたしは呟く。

あたしは何故こんな所でのうのうと生きているのだろうか、と。

……お父様に聞けば、きっとこう答えるだろう。

『世継ぎを産むためだ』

あるいは、

『この国を繁栄させるためだ』

……そんなこと、あたしは望んでなんかいないのに。

あたしが気に掛けているのは『国』ではない。『国民』だ。人々が平和に暮らせるようになるのなら、人々の悲しみが少しでも消えて無くなるのならば、他国と合併でもなんでもすれば良いのだ。戦争なんかせずに、相手の用件をすんなり飲んでしまえば良い。そうすれば、きっと丸く治まる。いつその事、この国なんか滅びてしまつても良いとすら思う。

そして何より、あたしは自由になりたいと思う。お父様の言ひ、

『こうあるべきだ』というものから逃れたかった。

女として、しおらしくするべきだ。

娘として、親の言ひことは聞くべきだ。

王女として、毅然とするべきだ。

国のために生きるためだ。

お父様の言う限りの無い束縛から抜け出したかった。

このままだと、お父様の意思のみであたしの全てが決まってしまう。お父様の決めた好きでもない相手と結婚し、寝屋を共にして、子を産み、育て、そして国のために生きる。

そんなの嫌だ。

そんな人生なんかいらない。

あたしは誰のためでもなく、自分のために生きたい。愛する人と結婚し、愛しい人の子を産み、育て、家族の為に生きる。そういう生活がしたいのに。

……だけどそんなことは許されない。

だからきっと、これからも気付かれない程度の小さな反抗をしながら、言われた通りに生きていくのだろう。人生に意味なんかいらない、意味のある人生なんか存在しないのだと、とこつそり呟きながら。

だけど、ある時を境にあたしは壊れた。

だんだんと口を閉ざすようになり、食事を取らなくなり、最後には部屋からでなくなつた。ただ、あたしは毎日月を眺めていた。あの月の鮮やかさは、この城に訪れてはくれないのだろうか、などと思いつながら。時折、あたしは月に向かつて手を伸ばした。あの明るさ、優しさを手に入れたくて。

あたしは月ばかり眺めていて、城内の何にも関心を示さなくなつた。きっと、自分の人生を諦めることが出来なかつたから。自分が生きる希望を、捨て去る事が出来なかつたから。あたしは無意識のうちに、大きな反抗心を育てていたのだ。心の容積を上回るくらいに。

そして、その人は、突然に現れた。

あたしは十五歳になつた。

戦争も終わつた。

そして、一つの出会いがあつた。

黒い軍服を着た、まるで月のような人。

その人は、あたしに白い薔薇の花を差し出し、呼びかけた。

『私のフィオナ』

そのとき、あたしは救われたのだと思う。

たつた一言。

その人の、その一言で。

相変わらず、あたしは白い百合の花が嫌いだつた。

何より、“マリア”という聖人の名を持つ自分自身が気に入らなかつた。ガラスケースに飾られた人形のような自分が、大嫌いだつた。

た。

けれど、そのときあたしは“フイオナ”になつたのだ。

それ以来、あたしはその人を慕い続けた。月に想いを馳せ、真白な薔薇を見るようになつた。彼が愛しく、そして恋しかつた。

月のように美しい人。

あたしは夜毎にその姿を想つていた。

……そして、今に至る。

2

俺は十五歳の時に軍隊に入隊し、その一年後、十七歳の時に軍隊隊長に任命された。

日々剣技や馬術、格闘などの武芸十八般の特訓に明け暮れ、磨きをかけ、そして未成年にも関わらずこの地位まで上り詰めた。異例とも言える、早過ぎる昇進。

周りの奴等には『狠犬』だの『狼』だと呼ばれ、そして畏怖された。敵のものとも味方のものともつかない屍の山を築き、踏み越えて戦場を駆け抜け、剣を振るい、敵の心臓を貫き、首を撥ねた。俺の剣技の前には、鋼の鎧などほとんど無意味だった。

敵国の奴等には“血濡れの狠犬”だの“野獸”だと呼ばれ、そして畏怖された。

恐れる物など何も無かつた。

生に執着する人間の、死ぬ間際の恨みを孕んだ目。耳障りなほどに響く、人々の悲鳴や、哀叫。痛み。人を断つ感触。大量に吹き出て来る真っ赤な血液。

自分の死でさえ、俺は恐れてはいなかつた。すべてを投げ捨てて、俺は戦つていた。

そんなるある日、俺は国王に呼ばれて城へと向かつた。

「隊長に任命されたらしいな、ファード・ギルト。」

「いや、今は“狼”と呼ばれているのだつたか。確かに、お前の放つ空氣は腹を空かせた狼のそれとよく似ている」

少し冗談交じりに言う王の前で、俺は方膝を付いて頭を下げる。

「……それで父上、本日はどのようなご用件で？」

「父と呼ぶな。誰が聞いているとも分からんのだから。……全く、一体何の為にお前等母子に『ギルト』の姓を背負わせたと思つていい」

「……ギルト、……罪、ね。母さんも良く言つていたよ、アンタに國から追放されて得た物は金と罪の名前くらいだとね」

母の口から聞かされ続けた恨み、辛み。忘れる事のない、悲しい声。思いだしながら半ば呟きのように言つて、俺は王を見上げた。これでもかというほどの金や銀、宝石の散りばめられた趣味の悪い豪奢な部屋。國民から搔き集めた血税の完成品だ。惡々しくて息が詰まる。

「確かに使用人に生ませたあんたの子だとバレたら大事だよな。だが俺は誰にバレても構やしない。お前の都合なんて知つたこっちゃないんだ。それで、用件は？　俺は早く帰つて馬の世話をしてやらなければならぬのだがな」

……ファード・ギルト。

運命の罪か、それとも罪の運命か。

自身に対する戒めか、それとも俺達母子に対する戒めか。

この男は自ら手を出した女に『罪』という姓と金を貰えて國から追放した。

俺は立ち上がり、王を睨みつける。

……全く、見ているだけで殺意が湧いてくる奴なんてコイツだけだ。こんな奴が国を担つてているのかと思うと吐がむ。実に不快だ。不愉快極まりない。この男の息子として生を受けてきたことが、俺の人生で最大の過ちだ。

「最近エレイジアとの戦が終わり、國もある程度落ち着いてはきた

んだが、今度は西のグノースの動きが不穏だ。それで、娘の護衛を頼みたくてな」

「娘？……ああ、例のマリア王女様か。見たことはないが、なかなか美しい娘だそうだな。良いのか？俺などに任せてしまつて。ともすれば、あんたへの腹いせに押し倒してしまうかもしれんぞ？俺はもともと、産まれた時から人の道から外れているんだ。今更、何も躊躇う必要など無いからな」

俺はくつくつと低く笑い、王を見上げた。

金鍍金でもされたような趣味の悪い髪と瞳。俺と同じ、鮮やか過ぎる金色。

最悪だ。

「……下衆が。口を慎め」

王は苦々しいと言つように俺を見下ろした。いや、見下した、という方が正確だろう。卑しいものを見るよつて、王は一段高くなつた玉座から俺を見下す。

「ははっ、これは随分と口の悪い。それで、どうなさるのです国王ママ？」

「なんてことはない。そつなつたらお前を始末するだけの話だ。命が惜しかつたら止めておくんだな。詳細はこれにまとめてある。来週までに返事をよこせ」

「はいはい」

別に惜しむほどの命など持ち合わせてはいなけれど、と内心舌を出しながらやる氣のない返事を返し、床に放られた封書を拾い上げる。

「それでは、失礼致します」

心中で早く死んじまえと毒づきながらも折り目正しく頭を下げ、退室した。

正直、引き受けるつもりはない。

人を殺せない仕事など退屈だ。

俺は堂々と殺しが出来るから軍人になることを決めたのだから。

殺しは、俺を心地よく酔わせる。麻薬にも似た快樂だ。人を殺せない人生など、きっと退屈だ。

……ああ、けれど。

案外、面白いかもしれない。

聞いたところによると、その姫君はまるで白い百合のように美しく、そして清らかな娘なのだという。

馬鹿馬鹿しい。

そういう奴ほど手におえないところに、何を言っているんだか。

百合。

確かに美しい花だ。それは認めよう。

大きな花びらが広がり、茎がすらりと伸びたその様は確かに華やかで美しい。花言葉も清純だの潔白だのとそれらしい意味合いのものが付いている。

しかし、百合ほど皮肉な花はない。

白は清らかな色だ。だが同時に、白は何よりも染まり易い色でもある。百合の花粉は強く香り、花びらや服につけば、それは得てして取れ難い。そしてその香りはむせ返るほどに甘く、どこか官能的ですらある。

それはつまり、何かに溺れたときそこから抜け出せなくなるってことだろうが。

いくら白く清らかで純粹でと言つても、所詮は世間知らずのお姫様だ。口説き文句の一つ二つで簡単に落ちるだらう。精々遊んでやううぢやないか、腹違ひの我が妹よ。

……はつ、お笑いだ。

兄妹で、揃つて道から外れるのだ。

くつり、と俺は笑つた。

あのクソ親父の慌てふためく様を見るのもまた一興。
引き受けたやううクソ親父。
少し、本気を出してやるよ。

・

……引き受けなければ良かつた。

今になつて、心底そう思う。

引き受けると返事をした次の日の晩、俺はこつそりと城内に忍び込んだ。憎き国王の一人娘、腹違いの妹。麗しのマリア王女サマとやらの「尊顔を拝むためだ。

もちろん、その姫君には気付かれない様に、だ。

月の明るい夜。

その人を見て、俺は息を飲んでいた。

月が煌煌と差し込む城の一室。そこに、彼女はいた。
まるで夜の闇のような色合いの真っ直ぐな黒髪。

凛とした、端正な顔立ちに、世を憂えたような表情。

磨き上げた琥珀を填め込んだような、鮮やかな金の瞳。

触れれば壊れてしまいそうなほどほつそりとした体つきに、白い肌。

月を見上げ、月明かりを掴もうともするように手を伸ばすその表情はただひたすらに楽しげで、わずかにやつれたような感じが彼女から幼さを消し、病的な美しさをかもし出していた。

それが一つ年下の、俺の妹の姿だった。

まさか。

俺は頭を抱えた。

まさか、本当に守つてやりたくなるとは……。

思つてもみなかつた。

恋愛など、暇を持て余しているような浮ついた奴がするものだと、今までずっとそう思つていたのだ。恋愛など、暇人がやつていれば

良いのだと。自分には関係の無い、縁の無いことだと思つていた。
それなのに、俺は見入つていたのだ。

腹違いであるとはいえ、自分の妹に。

実際、自分の考えがこうも容易く揺らぎ、呆気なく覆つてしまつ
ような物だとは思つてもみなかつた。

『守つてやりたい』

「の思いは、兄としてのそれではない。

一人の男としての思いだつた。

……どうかしている。

俺は一つ溜め息を吐く。

まさか俺が色恋沙汰で悩むことにならうとは……。

ああ。百合は、もしかしたら俺の方だつたのかもしない。決して白くは無い。けれど、何かに溺れたとき真っ先に沈んでいき、そこから抜け出せなくなるのは俺の方だったのかもしれない。きっと、今までそういうものが無かつただけなのだ。心から愛しいと、守つてやりたいと思つようなもの。自分自身の命さえ大切だと思つた事などなかつたのに。

けれど、現れた。現れてしまつた。

決してそういう対象として見ては行けない人物が。

……本当に、どうかしてゐる。

これこそお笑いだ。

俺の妹、マリア。

頼むから、お前は百合のように、俺のようになつてくれるな。

……出来ることなら、お前には気高く美しい棘を持つ者になつて欲しい。

汚れ無き純白の花びらと自身を守る棘を持つ、真白な薔薇のよくなき高い女性になつて欲しい。

その願いを込め、俺はマリアに純白の薔薇の花を渡した。

『フィオナ』といつ名前の、気高く清らかな薔薇の花。
どうか願わくは、百合ではなくフィオナのような女性に……。

『私のフィオナ』

そう言い残し、私はマリアの前から姿を消した。そしてそのとき
以来、常に彼女の側に控え、姿無き守護者となつた。
姿を見せる事無く、彼女を守り続けた。

そして、今に至る。

第四章 感想の行方（前書き）

新キャラ登場です！

「まずは、西のグノースへ逃げようと思つ」

ファドはそう言つて、広げた地図の上に指を走らせた。そして説明を続ける。

「グノースとスワラージは長く敵対関係にある。だから、いくら罪人の捕獲の為とはいえ、グノースはこっちの兵の入国を出来る限り拒むはず。独立心と反抗心が異常なほど高い国だから、しばらく追手の足止めをしてくれるだろ?」

「オーグランドは? 確か、オーグランドとも敵対していたと思うんだけど」

「オーグランドはチェックが厳しいんだ、国王の妹君が暗殺されだからまだ日が経つてないし、犯人も捕まつていなからね。その上、もし『スワラージの王女』と『スワラージの軍人』ということがバレたりしたら、それに託けて攻めてくる可能性がある。無関係の人を巻き込む訳にはいかないから、こっちには行かないほうが賢明だな。この国は血気盛んで命知らずな人間が多いから。まあ、国民性はどうにも出来ないからね」

呟いて、頭をひねる。だがすぐにグノースに向かうのが最善だろう、ということになつた。あたしはファドに、色々な国の事を知つているのね、と笑いかけた。ファドは苦笑してあたしの頭にぽんと手を置いた。

「まあ、仮にも元軍人だからね。スワラージの周辺諸国のことば大体頭に入つているよ。ああ、そうだ。それから、これ。知人に頼んで作つてもらつたんだ。無くさないように、持つていて」

「ファド、これってまさか……」

あたしは手渡された物とファドの顔を交互に眺める。

だつて、これつて明らかに…。

「そう、偽造の旅券。それが無いと国外には出られないから。馬鹿正直に自分のものを使つたらすぐに見つかってしまうし、だからと言つて国内ばかりうろうろしていくても、逃げ切れないからね」

名前、レオノーレ・ウィルソン。

出身国、グノース。

そしてその他諸々、自分の物ではない細かな設定。

「申し訳無いけど、国境を超えるときはフィオナでもマリアでもなく“レオノーレ・ウィルソン”になつてくれ。それから、私は“フィデリオ・ウィルソン”。設定は兄妹だ。良いね?」

「うん、分かった」

頷いて、変装用にとファードに買つてもらつた丈の長いコートを着込み、そのポケットに偽物の旅券を仕舞つ。そして同じように帽子と伊達眼鏡を身につけた。

「それじゃあ、そろそろ行こうか、レオノーレ

差し出された手を取り、あたしは笑みを浮かべた。

「ええそうね、フィデリオ兄様」

少し芝居掛かつたようになつて、あたし達は互いに顔を見合わせてクスリと笑う。

そして宿を出て、一人でセレンダインの背に跨つた。

・

「……髪を、切つてしまつたのかしら

ベアトリクス様は読んでいた本から視線を上げると、不意にそう呴いた。

「どうか、なさつたんですか?」

聞くと、ベアトリクス様は私にゆるりと視線を向ける。

「ねえエミリア、知つてる?『魔の力』っていうのはね、女性の、特に長い髪に宿るものなの」

以前ベアトリクス様のお部屋を訪ねて以来、何故か私はベアトリクス様の付き人することになつていていた。

不思議な方だと思う。

窓の外を眺めて微笑んでいたり、何も無い空間にそつと手を伸ばしたりする。妖精かなにか、見えない誰かがそこにいるように振る舞うこともある。時折、違う世界の人なんじやないのかと思つてしまふほどだ。

私はお茶の用意をしながらベアトリクス様の話に耳を傾ける。

「最近ね、感じないのよ。何も、感じないの。……なあーんにも、ね」

「……」

「あの子は知らなかつたのね。あの子の髪は、本当に素敵だつたのに。とてもたくさんの力を秘めていたのに……」

そして、私には分からぬ世界の話を唐突に始めたりする。柔らかく、穏やかな表情で。そんな時、私はこう考えてしまつことがある。この方は世界の全てを知り尽くしているのではないか、全てを知る術を持っているのではないか、と。

「……ベアトリクス様は、何かご存知なのですか？」

ベアトリクス様はゆるゆると首を左右に振る。

「何も知らないわ。……ただ、すべてが見えてしまつ」

そして、どこか自嘲するように微かに笑つた。

「……本当は、何も見たくは無いのだけどね……」

笑つて、ベアトリクス様は私に言つた。

“お人形”の話をしてあげる、と。

2

兵士五十人からなる大隊が十五隊。二十五人からなる中隊が三十隊。十五人からなる小隊が五十隊。そして、三人一組の少人数の精銳部隊が二組。

これが城の裏側に造られた軍の施設に常駐している兵士の数だ。

およそ二千人。

最近、これだけの人間を束ねていた男が姿を消した。

アイツの本当の名前は知らない。ただ“狼”だの“獵犬”、あるいは、“月”などとも呼ばれていた。

良く考えると、本当に謎だらけな男だつた。

軍の志願届けですら名前の欄は空白。十五歳のとき、奴は『武の国』であるスワラージの中隊を一つ潰して軍に入隊した。

入隊試験で一つの中隊と一人で渡り合えというのは、本来ならば有り得ないことだ。クソ生意気な若い志願者に対する虐めのようなものであつたが、あの男は見事に渡り合つていた。

……というか、中隊の兵士達のほとんどが、完璧に意識を失つていた。人を殺すだけならば、ある程度訓練を積めば可能な事だ。しかし、圧倒的不利の中で誰ひとり殺すことなく、重傷を負わせることがなくその意識だけを奪うと言つるのは至難の業だ。

やつは高慢で、残酷な男だつた。

戦いの最中、意識を取りもどし奴の心臓を狙つた男は、躊躇いなく殺された。頭と胴が泣き別れになつたそれを見て、奴は笑つたのだ。「折角生かしてやつたのに」と、そう呟いて。

そして、ひどく生意気な男だつた。

教官に名前を聞かれたときでさえ、奴は「好きなように呼べ」と言い放つたのだと聞く。

最年少だったあの男は、初めこそ“子犬”などとふざけた呼び方をされていたが、それは次第に“獵犬”となり、“狼”となつた。

あの男は、狂つていたと言つても良い。

あの月すらも見劣りしてしまいそうな程美しい姿とは裏腹に、異常とも言える驚異的な力と残虐性を持っていた。人を傷つける事にも、命を奪う事にも躊躇せず、ただ舞うように剣を振るつ。その様は、まさに戦神。

「まず、あいつが向かう可能性があるのはグノースか、あるいはオーランドのどちらかだろ？」「グラントのどちらかだろ？」

“狼”が消えてから隊長に任命された精悍な顔付きの男、デリスはそう言って、広げた地図の上に指を走らせた。

膨大な国土を誇るスワラージには、グノース、オーグランド、ソサエティ、ニー＝ヒの四つの小国が隣接している。中でも、グノースとオーグランドは以前からスワラージと長く敵対関係にある。

俺はデリスの指先を眺め、頷いた。

「……そう、でしようね。ソサエティ、ニー＝ヒの二カ国とは国交がありますから。関係も良好ですし。『狼』でしたらすでに手回しのされていそうな所は避けるでしょう。実際、その二カ国には指名手配所を送っています」

「それでだ、お前はどちらだと思う、アギナルド」

そう言って、デリスは俺に視線を向ける。

「お前の所の“エリニュエス”を出して欲しいんだ。少数の精銳部隊をまさか一つに分ける訳にはいかんだろう？」

「隊長の所の“フリアエ”を出しては？」

デリスはふと渋い顔をした。

「……いや、あいつ等では“狼”には勝てんだろう。奴とは経験も力量も違すぎる。両方を出してもいいが、“エリニュエス”と

“フリアエ”は犬猿だしな」

溜息を吐き、遣り難いよなあ、とデリスは呻く。

「……そうですねえ。女はねちっこいですからね、顔合わせたとたんに嫌味の言い合いとかになりそうですねもんね。下手したら殺し合いで、触らぬ神に、と言いますし」

「ああ。あいつらの間に入るなんて俺はしたくないからな。それで、お前はどうだと思う？」

「……グノースだと、思いますね」

「その根拠は？」

俺は地図上に視線をやり、答える。

「半分は、勘、ですかね」

「勘、だと？」

「俺の勘は良く当たるんです
そして俺は、微かに笑う。

「それに、グノースには“渡り鳥”^{ワンダーフォーゲル}が居る

自由気ままな渡り鳥。

お前はどうやらの國へと向かうのだろうか。

3

木枯らしが、あたしの頬を撫でて去つていった。風が強くて、出歩くには少し寒い。あたしはファードの腕にぎゅうっとしがみ付き、その目線の先にあるものをちらと見た。

「 フィデリオ・ウィルソンとレオノーレ・ウィルソンか。旅券も……あるな。良し、通つて良いぞ」

「ありがとうございます」

グノースの国境の前、あたし達は関所の若い兵士に頭を下げる。そして無事、グノースへと入国した。

「すごいね、内心どきどきしていただんだけど……本当に、入国できちゃつた」

後ろを振り返り、関所が見えなくなつたのを確認してからあたしは小声で言った。

「ああ。どんなコネがあるんだか知らないが、あいつは偽造文書を造らせたら一流だ。奴は軍にいたときからの知り合いなんだ。通り名は“鸚鵡”

「パロット?」

尋ねると、ファードは何処か懐かしそうに口を開いた。

「そう、元軍人で、一応友人だ。あいつが軍を抜ける時、少し協力してやつたんだ。奴に関する文書の類は全て破棄して、後は出国の際の手引とかね。まあ、善人ではないが、信用には足る男だ。」

あいつも、私と同じなんだ。……あいつにどんな理由があるのかは知らないが、決して自分の名を名乗らつとはしなかつた。そうしていつしか付いたのが、『鸚鵡』とか、あるいは『孔雀』という呼び名だつた。実は、私もあるいはの本名は知らないんだ。きっと、向ひいつも私の本名は知らないだらうな

「へえ、不思議な関係なのね」

「まあね。それで、今日から『三日パロット』の所に匿つてもう二つことにしたから。もう連絡も取つてある」

「一、三日つて……。あたし達、早く逃げなくひやこけないのひつ！」

「だからだよ」

ファードはひつとまるで悪戯を成功させた子供のよつた表情をした。「追手の奴等もさう思つてゐるはずだ。グノースにパロットがいることから、私たちが『』に立ち寄る』とは向ひいつも容易く想像できるだらう。」

だが、問題はその後。『』の先には、フィオナはもちろん、私にも知人と呼べる者はいない。となると、向ひうはグノースに隣接するスワラージ以外の全ての国に兵を送るだらう。けれど、そうして隈なく探したにも関わらず私たちが見つからなかつた場合、どうなるだらう？』

「そつか、相手を混乱させるのね！」

ぱん、とあたしは手を打ち鳴らした。

「そういうこと。向ひうが探しつくして引き上げたところに行けば見つかる可能性も低い」

「いいと思つわ、それ。……でも、いつの間に連絡を取つていたの？」

「フィオナの知らない間にちよつとね」

「ふうん。なんか、楽しみ。あ、ねえファード。あたし、パロットさん家の行った時もファードのこと、『ファード』って呼んでいてもいいの？」

今までずっと隠していたんだしょ？ とあたしは「アド」の腕にしがみついたままの状態で尋ねた。

「あー…、それじゃあ、『月^{ルナ}』で。向こうから呼ぶから」

「じゃあ、あたしは？」

あたしは「アド」の前に回り込み、顔を覗き込んだ。

「『フィオナ』は嫌だよ。絶対に。この名前は、とても大切だから。アドだけの名前だから。

たとえそれがアドのご両親でもお友達でも嫌。アド以外の人に、『フィオナ』なんて呼ばれたくないもの」

「フィオナ？」

あたしはアドの腕から離れ、セレンダインの毛並みを撫でながら続けた。

「この名前は……、『フィオナ』は、あたしの聖域なの」

アドは、クスリと笑う。

そして立ち止まり、あたしの額に額を当てる。

「分かった。それじゃあ、『セレネ』は？」

「どういう意味？」

アドはあたしの頭をくしゃくしゃと撫でる。

「月の女神様の名前。ぴったりだろ？」

セレンダインの手綱を引き、アドはゆっくりと歩き出す。あたしもその横に並び、歩む歩むと歩を進めた。

「フィオナ」

「何？」

「『フィオナ』と『アド』はこれから一人だけのものって」とで

あたしは一瞬、目を見開く。ちょっとだけ、頬が熱くなる。……ああもう、どうしてアドは、ちゃんとこうこうと話をしてくれるのだろう。

「良い？」

高い位置からの視線が、あたしの顔を覗き込んでくる。為て遣つ

たり、とこりか、そんな感じの笑みが、何だか悔しくて憎たらしく。

それでも側にいたいと思うのは、やっぱりファドが好きだから。

「良いよ、もちろん。でも……」

「でも?」

「手、繋いでくれたら。そしたら、そつしても良いよ」

今まで、何度も口付けはもらつた。たくさんの抱擁ももらつた。

だけど、良く考へると手を繋いでもらつたことは今まで一度も無い。

……だから、すつぐく欲しくなつた。

「ね、良い?」

ファドはクスリと笑う。

「仰せのままに、女神様」

4

「ゆーうきー やこない、あーられえー やこない、ふつてー もふつてー も、まーだふーりやあーまぬうー……」

俺は窓から顔を出し、この季節お馴染みの歌を口遊んでいた。決して上手いとは思つていながら、歌うのは好きだから。

しんしんと、しんしんと雪は降る。

そして、それはやがて全てを覆い尽くし、世界を真っ白に染め上げる。月は雲に隠されて、朧な影を落としていた。町のはずれにある、小さな煉瓦造りの家。童話かなんかにでも出てきそうな、可愛らしげ造りの家だ。窓から体を乗り出し、もうじき来るであろうおじいさんと雪を飛ばす。客様をきょりりと探す。

「……“お月様”はまだ来ないのかな、ねえ、リバティズ」

その中で、俺の頭の上を陣取つてゐる一羽の鴉に語り掛ける。

鴉は退屈そうに一声鳴くと、開け放たれていた窓から何処かへ飛び立つて行つた。その姿は夜の闇の中に飲み込まれ、すぐに見えなくなる。

「……ちえー。なんだよ、勝手の中に来つて来たクセにさ。あーあ、

野生の鴉に名前なんか付けるんじゃなかつたま、別にいいケドさと呴き、窓を閉める。

「退屈凌ぎにはなつたし。それに…」

火の弱くなつてきた暖炉に、薪をくべる。パチパチと、木のはぜる音がした。

「よつ、久しぶりだな」

「それに、待ち人も来たみたいだし。ネ、 “お月様”」
俺はわずかに軋んだ音を立てた扉の方に視線を向けた。待ち人一

人。相手は、懐かしい元同僚。

「 それから、美しいお嬢さん。いらっしゃい一人とも、待つて
いたよ」

俺は目を細め、にこやかにそう言った。

いつの間にか雲は風に流されて、月が明るく光っていた。
柔らかな月明かりはじんわりと輝き、冷たい雪を暖める。

「さつさ、鴉にフラれたところなんだ。慰めてよ」

・

栗色の髪。
空色の瞳。

女性のよつだとも言われる顔立ち。

首筋から鎖骨にかけて彫られた、緑色の翼の刺青。
取り敢えず女に不自由しない程度の外見。

これが俺、“鸚鵡”の姿。

「ねえセレネちゃん、ルナみたいな甲斐性なしなんかやめて俺にしない？ ルナなんかよりも優しくしてあげるよ？ お金もあるから不自由させないよー？」

俺はセレネちゃんに紅茶とパウンドケーキを出しながら話しかける。目を大きく見開いて、明らかに狼狽しているその反応が新鮮で、思わず手を出したくなる。

「ルナあー、セレネちゃん俺にちよーだいよ
「誰が渡すものか」

「ちつ、即答かよ。

「セレネちゃんは俺とルナ、どっちが良い?」

「ルナ」

「こつちも即答かよ。よし。少し苛めてやるつと。

「……そんなつれないコト言わなこでさア、少しふりこ……ねエ?」

「え?」

セレネちゃんの座っている椅子の背もたれに手を掛け、誘うように後ろから耳元でささやき掛ける。ちらと、ルナに視線をやれば、鋭い金色と目があった。

「あー、怒つてる怒つてる。

気にしてませんつて振りしているけど、バレバレ。目が釣り上がりつてきている。昔はこんな表情することなかつたんだけどな。ここまで惚れ込んでるとは、予想外。いやはや全く、入つて変わるもんだねエ。

「こんなヤツ、もうやめちやいなよ
もう一度、耳元でささやく。

「や、止めてください! 何なんですか貴方は!」

セレネちゃんは勢い良く立ち上がり、壁際まで走つて逃げた。けれどこの行動は俺にとつては返つて好都合だつたりする。

「……俺のこと、キレイ?」

セレネちゃんがこれ以上逃げられないよつぐつと体を近づけ追い詰める。

「……綺麗な髪だね」

よく手入れされた艶のある黒髪に唇を当てるど、セレネちゃんはびくりと肩を振るわせた。怯えて、泣きそうな顔も可愛らじい。こ

の世慣れしていない感じがまた……。

全く、分かつてないなあセレネちゃんてば。「」ーんなに可愛い反応されちゃつたら、余計に苛めたくなるじゃないか。

「……パロット」

不意に、後ろからルナの声がした。

「何、だよ、邪魔すんな。これからなんだからサ

「死相が出てるぞ」

ヒヤリ。

直後、喉元に冷たい感触。

そう言えばパウンドケーキを切り分けたナイフがテーブルの上に置きっぱなしだった、ような、気が、する。あらう。たーいへん。もしかして久しぶりに会つた元同僚のせいで大ピンチ？ 命の危機？ 絶体絶命？ うーわー、旅券だつて用意してやつたのにー。今まさに匿つてやつてる真つ最中なのにー。薄情者めー。血も涙もなんにもないな、ルナの薄情者。

んー、でもまあ仕方がないか。愛しい人の為だもんね。仕方がないよね、諦めてあげるよお月様。

「……あー、はいはい、分かつたよ」

両手を上げて降参宣言。

「ル、ルナつ」

セレネ嬢はルナの後ろに逃げ込み、俺を睨みつけてくる。

「あーあ、おつかない顔しちゃつてー。そんなにほつぺた膨らまして唇尖がらせていちやあ美人が台無しよお嬢さん」

からかうようにそう言つてぐしゃぐしゃとセレネちゃんの頭を撫でてやる。乱暴な仕草で、もうしませんよと意思表示。可愛い女の子と遊べたからこれについてはもう満足。とはいえ、やつぱりルナの行動はやり過ぎ感があるので抗議する。

「……ちょっと遊んでいただけなのに喉にナイフ当てるなんてビデくねえか？」

「ナイフ？」

ルナはからかうようにクスリと笑つて手を開き、それを床に落とした。キン、と高い金属音を立てる。

それを見て、俺はほっと一つ息を吐いた。

「……ルナあー」

「当てたのはフォークの柄だ。当てたところで死にはしないんだ、そんなに怒るな。そんな瑣末なことは置いとくとして、お前は一体いつから他人の女にまで手を出すような見境のない奴になつたんだ？ 確かにお前は以前から女好きだった。だがそれにしたつてもう少し大人しかつたぞ」

「だから『ゴメン』って。今のはホントに冗談なんだからサ。てゆーか、ルナこそどういう心境の変化なの？」

「は？」

ルナは眉を寄せ、首を傾げる。そしてその表情のまま椅子を引き、セレネちゃんを座らせた。ありがとうと笑みを浮かべるセレネちゃんに、ルナも柔軟な笑みを返す。あらあらまあまあ、しばらく見ない内に紳士役板に付いちゃつてるじゃないの。やるねえルナつてば。いや、やるのはルナをここまで紳士にしたて上げたセレネちゃんか。それにしてホントに仲睦まじいこと。羨ましいなおい。

「『恋愛なんか暇を持て余していて、尚且つ浮ついた性格のヤツがするもの』なんじゃなかつたっけ？」

「……そんな昔の話を持ち出すな」

ルナの不機嫌そうな咳きに、セレネちゃんは何故か俺を凝視する。「何？ どうかしたのセレネちゃん。俺に乗りかえる気にでもなつた？」

「……羨ましいな、と思つて」

「え？ セレネちゃん今俺の質問無視しなかつた？ うつわあー、ひつどいナー」

「ルナのこと、たくさん知つてゐるのね、パロットさんつて。昔のルナつてどんな人だつたの？」

耳に手を当ててわざとらしく聞き返すが、セレネちゃんは何もか

も全てを聞かなかつたことにして話を進める。ここまで無視される
なんだか悲しい。おにーさん悲しみのあまり泣いちゃうよ？ 泣き
叫ぶよ？ ねえ。

ああ、こいつとしたその表情が、『あたし何にも聞いていません
ん』と言い張つてい。ああもう、分かりましたよ。昔のルナのこ
と話せば良いんだね。分かつたよ。分かりましたよー。

「……昔のルナねエ。頑固で礼儀知らずで無禮で無愛想でこいつと
もしない、可愛げのないつまんねーヤツだつたよー。こんなにこ
ころ表情変わんなかつたし。女なんか訓練の妨げにしかならないな
んてことも言つてたもんな。そんなルナに愛しい人が出来たなんて
素晴らしい変化だね。これはきっとセレネちゃんの功績だよ。

とにかく昔のルナは今のルナとは全く正反対。それが、まさかこう
なるとはねエ、って感じ。こんな紳士的なルナなんて、軍に居た頃
は一度も見たことなかつたしね。ホント、意外だなー。人つて変わ
るもんだよねエー」

「……一体何が言いたいんだお前は」

「べつにいー。随分と」執心ですネーつてコトだ。……ああ、そ
うだ。この家、部屋数ないから一人同室ネ。イイ？ セレネちゃん

「ええ」

「あれー？ もつと動搖するかと思つてたんだけど

セレネちゃんは一瞬きょとんとするが、すぐにまたにこいつとした。
「今までだつてそうだつたもの。気にするよつなことじやないわ。
それで、どこのお部屋を使えば良いの？」

「あ、ああ。階段あがつてすぐの部屋」

……いやいやいや。俺が動搖してどうする。しつかりしろよ俺。
ていうかルナつてばいつからこんなに手が早くなっちゃつたのさ。
「ありがとう。それじゃああたし、先に休ませてもらいますね。ケ
ーキ、ご馳走さまでした」

ペこりと礼儀正しく頭を下げて、セレネちゃんは部屋に入つて行
つた。

「じゃあ、私も休ませてもらひ。今日はありがとな」
カタン、と静かな音を立ててルナは立ちあがる。そしてセレネちゃんの後を追うように歩き出した。

「なあー」

「何だ？」

階段の途中で足を止め、振り向く。相変わらずの綺麗な金色。整った顔に、俺は尋ねる。

「もうヤッたの？」

「……派手に死ぬか？」

「じょーだん。それじゃあ、もー一つ質問」

人差し指を立て、俺はからかうように一ヶと笑った。

「いつから一人称『私』になつたの？」

「……セレネに、出会つてからだ」

「ふうん」

俺は呟く。

「何が言いたい？」

「別に」

紅茶を一口すすり、ルナを見上げる。

「しつかり守つてやんなよ」

「言われなくとも」

そう言つて、ルナも部屋に入つて行つた。

すつきりと晴れ渡る青空。

馬の上で、セレネちゃんはこくりと笑う。

「一日間、お世話になりました」

ルナの体に腕を回した格好のまま、ペコリと頭を下げる。

「いいよ。その間、家事とかほとんどやつてもらつちやつたしネ。

返つて有り難かつた。それじゃあ、気をつけて

ルナも無言で頭を下げ、そして手綱を取った。ゆるやかな歩みを始め、その姿はやがて見えなくなる。

「……バーカ。」

二人の姿が見えなくなつて、俺は笑つた。

「ねエ、これでイイの？ アーリマン」

サク、と雪を踏む音。

それと同時に、黒髪に黒い軍服の好青年然とした長身の男が家の影から姿を現す。

「ああ、上出来だ」

クスクスクス。

ああ、可笑しくて笑いが止まらない。その中で、俺は呟く。

「貪欲な鸚鵡、不滅の孔雀。そして……」

クスリと笑い、アーリマンはその後を続ける。

「自由気ままな渡り鳥」
ワンドーフォーゲル

それに、俺は頷く。

「渡り鳥つてのはイイよねエ。

彼等の中には国境なんて厄介なモノは無いんだ。自由に、行きたいところに行けるんだから」

「君の中にだつてないだろ？ ワンドーフォーゲル。君もいつだつて、どこの国にも行くことが出来るんだから」

「まあ、仕事の内容にもよるけどネ。……それにしても、今回はなかなか楽しい仕事だつたネ」

「それは良かつた」

「敵対する者同士から同時に仕事が来るなんて、あんまりないよ」「本当に」

匿つて欲しいと言つて来るヤツがいた。

そいつ等を捜して欲しいと言つて来るヤツがいた。
両方を取つたら、追う方が有利になつた。
ただそれだけの話。

「ホントは俺、ルナのことキライだつたんだよね」「だろうな」

俺はまた、クスリと笑う。

「本当に、『渡り鳥』つてのはいいよね」

「全くだ」

「仕事という大義名分のもとにキライな人間を墮としてやれるんだ。
こんなにお得な仕事、なかなかないよ」

アギナルドもまた、クスリと笑う。

「……俺の勘は良く当たるんだ」

「知ってるよ」

「お前のそういう性格も、実は大分前から気付いていた」

「だろうね」

「本当にあいつのこと嫌いだよな」

「俺は金持ちと顔のイイ男は全部キライなんだ。アーリマンも含めてネ」

「それはどうも」

晴れ渡る青空。

日の光が新雪に反射して、きらきらと光る。

光の中には影がある。

光の外には影ばかり。

貪欲な鸚鵡は饒舌で、不滅の孔雀は栄華を極める。

「ねエアーリマン、俺にぴつたりだと思わない?」

「ああ、ぴつたりだ」

俺達はクスクスと笑う。

「……渡り鳥には『舶来の鳥』つて意味もあるんだよ。…ねエ、フ
アド、マリア王女」

え？ バれないよう人に人を欺くにはどうすればいいか？

『問えば、奴はにこりと笑つてこう言つた。

「そんなの簡単だよ。まず最初に、自分を騙しちゃえばいいのさ」

・

「まずは、自分を？」

あたしの定位置となつたファードの隣。腕にしがみつきながら、あたしはその言葉に首を傾げた。

人の行き来の激しい商工業の盛んな街。

たくさんの人、商人たちの客寄せの声、女人、男の人、それに子供たち。たくさんの音にあふれている。賑やかで、華やかで、すごく楽しい。今までこうやつて街を歩いたことがなかつたから、世界にはこんなにたくさんの人たちがいたのかと驚いた。ここの人たちにとつてはいつも通りのじく当たり前な風景なのだろうけれど、あたしにとつてはすごく新鮮だ。

「そう。まずは、自分を信じ込ませる。自分で真実だと、本当のことだと思いこんでいる内容を話しているのなら、それは嘘ではないだろう？」

追われている場合、自國では過疎地域 それでいて人の行き来が少くない所 を選び、他国ではとにかく人の多い所を進むのが良いのだと、ファードに教えてもらつた。それが一番、人の印象に残らない動き方らしい。人というのは案外見ているようで見ていないものなのだとも言つていた。

「そう、なの？」

あたしは、ん？ ともう一度首を傾げる。ファードは「そうだな」とわずかに空を仰いだ。

「そうだな……、例えば、私が『月は巨大なチーズのかたまりで出来ている』と信じているとする。そして、それを真実として何も知らない誰かに教えた場合、それは嘘を吐いたことになるだろ？」「ならない……、かな」

「そう。後からそれが間違いだったと気が付いたとしても、その時の私にとつては、それが『事実』であり、『真実』なんだ。嘘を吐いているのなら、それはまあ相手の話し方や仕種で分かるけれど、事実を言っていると自分で思い込んでいたら、嘘を吐いているとは分からないし、気付きようがない。まあ、本当の答えを自分で知っているのなら話は別だけだね」

「ふうん」

あたしはクスリと笑って、なんだか詐欺師と話をしているみたいだと言った。

「そうかもしねないよ？ 何にせよ、嘘を吐いたことのない人間なんかいない。たとえそれが、何かを守るために嘘だったとしてもね。ファイオナだって、一度や二度くらいはあるだろ？」

「……そうね」

あたしは咳く。

悪戯な風があたしの髪を乱し、ファードのコートをなびかせた。

「ねえファード、昨日は一晩中歩いていたから疲れちゃった。セレンダインも疲れているみたいだし、そろそろ今日の宿を決めましょうよ」

「ああ、そうだな」

・

「ねえファード、考えていたんだけど、一番の詐欺師はあたしかもしれない」

「……やっぱりとした、小さな宿屋。

部屋に入るなり、フィオナは寝台に腰を降ろし、そう言った。

「あたし、いつも自分のこと騙していたもの。今こんなに欲求通りの生活が出来ているのが不思議なくらい」

「……フィオナ、何を？」

「いつもいつも、自分の中に自分の感情を押し込めて、押し込めて

……

様子がおかしい。

「……大丈夫か？ 顔が、少し赤いみたいだ。熱があるんじゃないのか？」

こつん、と額を当てる。

熱い。

やはり馴れない旅をして疲れが出たのだろう。

「……やっぱり、熱があるな。辛いなら早く言つてくれれば良かつたのに。ちょっと待つてろ、今、薬を買つて……」

「待つて……」

袖を掴まれて、私は動きを止める。

「側に、いて欲しいの……」

フィオナを寝台に寝かせ、前髪を撫でる。

「……分かった。ここにいるよ」

手を握つてやると、フィオナは安心したように微かに笑い、そのまま眠りに落ちた。静かな寝息が小さな唇から零れる。額に濡らしたタオルを乗せてやり、もう一度前髪を撫でた。

……無防備な寝顔。

私はそつと、その唇をなぞる。

「マズいな」

今まで、『兄妹』として抑えていた。

今まで、その唇には触れないようにしていた。

こんなにも無防備だと、籠が外れてしまいそうにな。

「……本当に、マズい」

私は床に座り、寝台に寄りかかった。
この一線は、絶対に越えてはいけない。

「どうしろって言つんだ」

「この気持ちは、どこにやれば良い。

やり場の無いこの気持ちは、一体どこに持つていけば良いんだ。
フィオナは、私を愛し、信じ、慕つてくれている。誰よりも、私のことを想つてくれている。なのに、私はそれに応える術を持たない。だからせめて誠実であろうと、努めてきた。

兄妹である以上この一線は越えてはならないと、心の中で何度も繰り返しながら。

「……くそつ

吐き捨てるよじに呟いて、私は一つ溜め息を吐く。

いつも、押し倒してしまつことが出来ればどれほど楽だろうか。
そんなことをする勇気もない癖に、私はそんなことを思つていた。
くだらない、と私は天井を見上げ呟いた。

男をハムレット型とドン・キホーテ型とに分けたのは誰だつただらうか。それなら、私はきっとハムレット型だらう。

……まあどちらにしても愚かなのには変わりないが。

少し自虐的にそう考えながら、私は床に座つたまま目を閉じた。

71

「……ん」

熱は下がつたらしく、氣だるい感じも消えていた。

あたしは少し目を開き、辺りを眺めた。

寝起きの、ぼんやりとした不鮮明な視界の中に、ファドの姿だけがやけにはつきりと鮮明に映る。

「……ずっと、側に居てくれたんだ」

冷たいだらうに、ファドは床に座つて、寝台に寄りかかるよつこして眠つていた。腕を組み、頭だけを寝台の上に預けている。

……綺麗な寝顔。

あたしは金色の前髪をちょっとだけ持ち上げ、穏やかな表情で眠るファードを見つめた。

こんなに綺麗で優しい人、ファード意外に見たことない。

怒らない、よね？

あたしは静かに寝台から降り、ファードの横に座った。

「……」

そしてゆうくじと、唇を重ねた。

窓から差し込む月明かり。

それは柔らかく二人を包む。

あたしは唇を離して、わずかに赤面した。

ファードはまだ規則的な寝息をたてている。その姿を見ていると、何だか自分がとんでもないことをしてしまったのではないかなどと思えてくる。

あたしはまた、ファードの寝顔をじっと見つめた。

「…ま、いつか

互いに愛し合っているのだから、何の問題もないはずだ。えへへ、と笑い、あたしは寝台から布団をはがしてファードに掛ける。そして自分もその横にぴったりとくつつき、瞳を閉じた。こんなに近いところで眠るのは初めてでドキドキしていて、だけど、嬉しくて、暖かくて……。

ファードの肩に頭を寄せ、あたしは実感した。

幸せだ。

心から、そう思つ。

「…あたしは、幸せだよ」

大切にしたい。

今この瞬間が、本当に幸せだから。

『どうだ、私の娘は』

その言葉に、俺はわずかに目を細める。にせにせと呑のない笑みを浮かべて言葉を紡ぐそれは、ひどく、醜かつた。

『愛しいのだろう? 好きなのだろう? 私の娘が、自分の、妹が』

『ああ、何で、どうしてこの男が』

『酷く滑稽だ。お前は愛しいと思う女にほんの少しも触れる事もできず、言葉を交わす事さえ叶わないのだ。ああ、愉快、愉快』

その言葉に周りが見えなくなつた。俺と同じ金の髪と金の瞳で、悪辣な、品のない笑みを浮かべる。俺と同じ、フィオナと同じ色で歪むその顔を、俺は知らず切りつけていた。

・

嫌な夢を見た。

身体を起こしそうと身をよじると、布団が掛けられ、すぐ横でフィオナが寝息を立てていた。少し焦りながら、けれど平静を装いながら立ちあがり、フィオナを寝台に寝かせ、布団を掛けた。

……今、何時くらいだろうか。

そう思い、部屋の隅に置かれた小さな時計に目をやる。

午前一時。

……もう寝つけそうにない。悪い夢を見たせいだろうか。それとも、すぐ隣にフィオナが寝ていたからだろうか。異常なほど目が冴えてしまっている。

「……」

落ち付け、と軽く頭を振る。その一瞬、ぞわりと何かが背筋を這うような感覚がした。

……これは、予感?

いや、違う。確信だ。

扉の向こうの複数の気配。

すぐに分かる。

この感覚。……ああ、懐かしいとすら感じる。

かつて軍人だつたとき、戦場に立つていたとき、最も身近に感じていた感覚。戦場では、誰もがそれを剥き出しにして剣を振るつていた。

戦場での記憶が蘇る。

久しぶりの感覚。

これは、殺氣。

静かに剣を抜き、神経を研ぎ澄ます。

……三人。

いや、四人か。

しかし扉越しでも動きが雑なのが分かる。殺氣ばかり一人前で気配の消し方も何もなつていいし、その上足音すら消していい。足を踏み下ろす度にカツ、コツン、と音を立てる。ぼそぼそと話し声まで聞こえてくる始末。わざわざ剣を使う必要はないだろうと、私は剣を鞘に納めた。

誰かに雇われたヤクザか何かだろうか。しかし、だとしたらこいつ等は一体誰に雇われたんだ？ まさか、居場所がバレた？ バレたのなら、一体誰が？ それが可能なのは、アイツくらいだが、しかし……。

いや、まあ良い。扉越しでも気配が分かるくらいだ。どうせ大したことはない。

「……フィオナ」

「……ん。何？」

「しつ、静かに。 少しの間、布団をかぶつて丸まつていて。極力動かないで、声も出さないで。すぐに済むから」

寝台の隅に座らせ、頭から布団をかぶせた。決して出て来ないよううにと言って、扉の方に向き直る。

「それでは一つ、お手並み拝見とこましょうかね」

口角を歪め眩いた直後、四人の男達が怒声を上げ、勢い良く扉を蹴破つて中に入ってきた。扉の蝶番が外れ、酷い音がする。こんな優男なら容易いな、などと余裕の笑みを浮かべる彼等を見据え、私はクスリと笑つた。

「非常識ですね。深夜に寝込みを襲うのなら、静かに入つてくるのが常識でしょう?」

突進してきた一人の腹を蹴りつける。

そいつが一人の男の方によろめいたのを横目で見ながらもう一人の男の腕を引き、首筋に手刀を落とした。昏倒したそいつを足許に転がし、後ろから振り下ろされた剣をかわして鳩尾に膝を叩きこむ。そしてその勢いのままに最後の一人の頭部を蹴りつけると、そいつは後ろの棚に頭を打ち付けてその場に倒れ伏した。ビクリと一度痙攣すると、その男は動かなくなる。

「……まさか受け身すらまともに出来ないやつが来るとは、思いませんでした」

うつ伏せになつている奴を足で転がして仰向けにさせ、四人全員が意識を失っているのを確認。そして、フイオナに駆け寄つた。

布団を剥がし、笑顔を向ける。

「大丈夫か?」

「うん。あたしは大丈夫。……あの、この人たちは?」

「分からぬ。だけど、早いうちにこの街から出た方が良いな」

フイオナは違う! と叫び、私の服を掴んできた。

「そうじゃなくて、この人達、ちゃんと生きてるんだよね? 死んでたりとか、してないよね?」

本気で心配そうに聞いてくるフイオナに、私は思わず吹き出してしまつた。戦つた後、敵の安否確認まで行われるものだとは…

「ねえ、ファドつてば!」

「大丈夫だ。全員、気絶させただけだから。死んじやいないよ。そんなことより、早く逃げよう。エントランスの方は見張りがいるだろうから……」

ちらと、フィオナに視線を向けた。

「……いけるかな」

「……見張りは、居ないな」

ファードは部屋の窓から頭を出し、周囲を見回した。

「一階だし、まあ、なんとかなるか」

独り言のように言つて、ファードはあたしの方を振りかえる。

「フィオナ」

「何？」

ファードの傍らに寄り、顔を覗く。

「何があつても、フィオナだけは守り抜くから」

そう笑つて、ファードは人一人がようやく通り抜けられる程度の大きさの窓から軽やかに飛び降りた。

スタンつ、と小気味良い音を立ててファードは地面に着地すると、あたしに向けて両手を広げた。おいで、と言つよう。

「行くよつ」

「ああ」

窓枠を蹴り、飛び降りた。

唐突な浮遊感。直後の、急速に戻つてくる重力。

容易く、ファードはあたしを抱きとめる。そして、ファードはゲームを楽しんでいるかのよつな楽しげな笑みを浮かべて走り出した。

「このまま運ぶよ」

あたしを抱いたまま馬小屋へ走る。セレンダンの背にあたしを乗せ、ファードもあたしの後ろに飛び乗つとした。

「おい、居たぞ！」

「えいつ！」

後ろからのガサツな声。剣を構えてこっちに走ってきたその大柄な男に向けて、あたしは靴を思いきり投げつける。

「うわっ！」

顔に当たり、その人は一瞬動きを止めた。

「ははっ。やるねフィオナ。 セレンドайн、行け！」

一聲いなないで、セレンドайнは駆け出した。後ろの方で、また誰かが叫ぶのが聞こえた。怒声があちこちで響き、街は半ば地獄絵図のようになる。

あたしはもう片方の靴も追つてくる人達に向けて思い切り投げつけた。

その時、あたしの視界に入ってきたもの。

似顔絵入りの指名手配書。

それが街の至るところにべたべたと貼り付けられている。

この一人を捉えし者に金一封贈呈

細部まで確認することは出来ないが、おそらく彼らの反抗心を煽るような内容がかかっているのだろう。ここは反抗心の強い人間の多い国だと、ファードが以前そう言っていた。『こんなことも出来ないのか？』というような煽り文句に、懐を満たすのに十分すぎる額の報奨金。それだけ揃つていれば、すぐに乗つてくるだろう。

しかし、昼間、街に入った時にはこんなものは貼られていなかつた。街に入ったのを確認してから貼つた？ ということは、まさか。「ファード。もしかして、パロットさんつて…」

「分かつてゐる。おそらく、フィオナの想像通りだ。だけどその話は後で。取り敢えず今は

横に接近してきた馬の脚を切りつけて転倒させ、正面から来たもう一人の男には小型のナイフを投げて足に傷を負わせる。馬から落ちたのか、後方で悲鳴が聞こえた。

「逃げ切るのが先決だ」

「月が明るくて良かつたね」

追つ手を巻き、あたしたちは森の中へと身を隠した。

気付かれてしまつてはいけないので焚き火はせず、目立たないよう黒いブランケットを頭からかぶつて大きな木の下に一人で身を寄せる。

こんな時にこんなことを思つるのは不謹慎かもしれないけれど、頭からブランケットを被つているファードはなんだか可愛い。靴のない足に、雪の冷たさがじんわりと染みてきた。

「まさかこんなに早く見つかるとは」

「うん。……パロットさん、だよね」

「だらうな。ごめん、認識が甘かつた。あいつを少し、信頼し過ぎていたようだ」

ちらちらと雪が降り出した。少し寒いけれど、雪は足跡を消してくれる。あたしはファードの言葉に頷き、空を仰ぎ、気にしないで、と微笑んだ。半分に欠けてはいるけれど、月は明るく、煌煌と輝いている。

「ファードと共にいる限り、あたしは絶望なんかしないわ。『世の中には福も禍もない。考え方一つだ』ってね。シェイクスピアもうう言つているわ」

「……考え方一つ、と言われてもな」

苦笑するファードの顔を覗き込み、やっぱり可愛いとあたしは頷いた。

「追われてはいるけど、あたしは不幸なんかじゃないわ。ファードと一緒にいられて、幸せ。それに、そのお陰でブランケットを被つて、雪ん子みたいになつててるファードを見れたんだもの。ふふつ、可愛いよ」

我慢できなくなつて、あたしはファードの頭を撫で回した。そのついでにブランケットからはみ出している金髪も、ちょいと指先で突いてみる。

ファードは耐え切れなくなつたように吹き出した。しかもわずかに涙目になつてゐる。

「可愛い、か？」

「うん、とっても」

はは、とファードは笑つて、涙を拭つた。そしてふうと息を吐き、口を開いた。

「 人を欺くには、つて話。眞間にしただろ？」

ファードは懐中時計を開きながらそう話し出した。懐中時計を覗くと、まだ一時半だった。あれからまだ三十分しか経つていなかつたのか、とあたしは驚いた。もう一時間くらいたつていうような気分でいたのに。

「うん。まず自分を騙せば良いつていうやつでしょ？」

「ああ。あれはもともと、パロットに聞いた話なんだ。軍にいたときには、一人で組んで仕事をする事も結構あつた。敵国の視察とかでね」

あたしはこつん、と頭をファードの肩に置いた。ファードは横田であたしを見ると、また話を続ける。

「昔から女癖が悪くて素行も悪くて性格も悪くて腕だけは良かつたんだがある日突然飽きたから止めるとか言い出して辞表も出さず勝手に軍を辞めていつた訳の分からぬ自由すぎる奴だつた」

「……なのに、信頼してたの？」

少しほかんとして、あたしはファードを見遣つた。

「それでも、仕事だけはきつちりやる奴だつたから。金さえ絡めば、いい加減な仕事をする事は一切なかつた。今回も本当は仕事として頼んでいたんだ。少し、ほうがいとも思えるような金額を出して。

……まあ、裏田に出てしまつたけど」

「……そつか」

「ああ。ごめん」

「大丈夫だよ。ファードと一緒に居られるのなら、あたしはどうなつても良いもの。ファードの傍に居られれば、ファードがいれば全然怖く

ない。あたしはそれで幸せだよ

眩いて、あたしは周囲を眺める。

皆、どうか、あたし達を守つて。追つ手を阻み、あたし達を守つて。

動物たちに、木々に、全てに語る。

「……あれっ？」

「どうした?

何も、反応してくれない。動物も、木も、星も、おしゃべりな風すらも応えてくれない。ただかさかせと、何かさひやを笑うだけ。

「何も厭うてくわなしの」

六

風に揺れて、木々がかさかさと音を立てぬ
お願い、静かに

「マリア」

その間に、フタヅはもう一つと立ちあがる。あたしはその場に座つ

力圖而得之者也

金色の髪に、金色の瞳。けれどその顔は、痛々しく包帯に覆われ

卷之三

「いいや！」

サク、ヒョウを踏み、歩み寄る。高圧的な空氣はそのままに、あたしに近づく。ファドはぽつりと、生きていたのかと呟いた。そして、一步あたしの前にでて、お父様を睨みつけた。

「ここには、『マリア』なんて人間はない。この人は貴方の娘の

“マリア”じゃない。 “フィオナ”だ」

静かに、ファードは言葉を紡ぐ。

「ファ、ファードっ」

ファードはお父様を思いきり睨みつけている。こんなところで、ここまで来て連れ戻されるなんて、絶対に嫌だ。あたしはもう“お人形”には戻りたくない。ファードと、別れたくない。

「…」

サクリ。サクリ。

足音が近づき、ファードのすぐ前でひたと止まる。

「娘を返してもらおう。そろそろ、恋人じこにも満足しただろ？」

？」

「遊びのつもりは一切ない」

冷ややかに言い放つて、ファードは剣に手を掛けた。

「帰れ」

「マリア、帰るぞ。兄妹では何をやっても所詮は真似事にすぎん」

…兄妹？

あたしはファードの後ろから出て、お父様を真っ直ぐに見つめた。

「フィオナ」

「一体何を仰っているのですか、お父様。確かあたしは、一人っ子だつたと記憶しているのですけれど。あたしにはお兄様なんて人はいないわ」

わざかに目を細め、お父様は氣だるそうに口を開く。

「使用人に産ませた私の子だ。ファード、そろそろ手を引け」

お父様は緩慢な動作であたし達に背を向け、歩き出した。

「マリア、帰るぞ」

着いて来い、とでも言つように少しだけ振り返り、そしてまた歩を進める。

「ファード、そんな、嘘でしょ？ 嘘だよね？ そんなの、あたしとファードが、兄妹だなんて」

「……」「……

ファードは一步後ろに下がり、左右に首を振る。

「事実だ」「

「そんなつ

それでも、ヒファードは咳く。

「それでも、フィオナは渡せない

静かに、お父様の背中に言い放つ。

「ファード……」

こんな時なのに、その言葉が嬉しくて思わず笑みがこぼれる。ぴたり、とお父様は動きを止め、あたし達を見遣つた。

「ならばお前などもう用なしだ。」アギナルド

咳いて、誰かの名前を呼んだ。そして、複数の足音。

「後は頼んだ」

それだけを言い置いて、お父様はもと来た道を帰つていった。

「久しいな、『狼』」

アギナルドと呼ばれた黒髪の人は、そう言って朗らかに笑う。着ているものから、スワラージの軍人だということが分かる。その後ろに控える三人の女性は、真つ直ぐにあたしを見つめてきた。

「……ファード？」

「後ろに隠れていってくれ」

咳いて、ファードは一步前に進み出る。

「何があつても、フィオナだけは守り抜くから

スワラージの軍服を着た、頬に揃いの蒼い炎の刺青を持つ三人の女性。彼女達を眺め、ファードはわずかに目を細めた。

「『エリニユエス』か」

軍屈指の魔術部隊、『エリニユエス』。

ギリシャ神話の三女神の名を与えられたその部隊の歴史はまだ浅

いが、実力はある。三人で一つの部隊を成すエリニユエスの力は、大隊のそれにも匹敵する。

エリニユエスが出てきてしまつては、グノースも拒むことは出来なかつただろう。国自体にもかなりの力があるし、それに、仮にも『武の国』スワラージの精銳だ。入国を拒んだら、国の存続すら危ぶまれる。

ファードは静かに剣を引きぬいた。

「覚悟なさいませ、ファード・ギルト様」

一人が、かすかに笑う。

「我ら“エリニユエス”は復讐の三女神。罪を追求する三人の女神。……貴方は、原罪にも近い」

一人が、無表情に言う。

「ほんとに綺麗ね。ちょっと惜しい気もするけど、王サマからの命令だから、恨まないでね？」

一人が、華やかに笑う。

「それでは、『死合』と洒落込みましょうか」

三人は同時に言った。

気持ちが悪いくらい、ぴつたりと揃えて。

「『死合』、か……。良いだろう」

刹那、ファードは駆け出した。

「――！」

どこのものなのが分からぬ言葉を吐き出し、エリニユエスは薄く笑みを浮べる。

球状の炎や雷がファードを追いまわし、ファードはそれを軽やかにかわしながらエリニユエスに向かっていく。

「へえ、さつすがあ！　“血濡れの獵犬”の呼び名は伊達じやあないね！」

後ろに飛びのいて振り下ろされたファードの剣をかわし、エリニユ

エスは言つ。ファードはちつと舌打ちをして、再びエリーコエスとの間を詰める。

……どこか、楽しげに見える。

エリーコエスも、ファードも。

身近に迫る死の香りに、酔つてているように見える。

ファオナはただそれを見つめていた。どうしようもない無力感。けれど、動くことも出来ず、声を出すことも口を開くことも出来ず。に目を見開き、ただその戦いをじつと見つめていた。戦場とは、こういうものなのかと寒気がした。けれど、目をそらしてはいけないような気がして、じつと、見つめていた。

舞のようだ。

アギナルドは四人の戦いを眺めながら、そう思つた。

エリーコエスの紡ぐ呪文に合わせて炎や雷が空を舞う。それを弾く剣の一線がキラリと光り、獣じみたファードの瞳がエリーコエスを射る。

舞のようだ、軽やかに。

けれど、射るようだに鋭利に。

ぞわ……。

鳥肌が立つ。

“狼”と、俺を最初に呼んだのは誰だつただろうか。

死合。

そう。『試合』ではなく、『死合』だ。

命の遣り取りに試合などという生ぬるい言葉は使えない。そう、これは試合ではなく『死合』なのだ。

「せめてもの情けだ。苦しまぬよう、逝かせてやる」

ファードは酷薄な笑みを浮かべて呟くと、エリーコエスの喉に剣の切つ先を突き立てた。わずかな迷いもなく、真っ直ぐに。

雪で白く染まつた世界に鮮血を散らし、静かに倒れる。首と体が

辛うじて繋がつていい状態だ。おそらく即死だらう。

その瞬間を見ようともせず、ファードはまた炎の球体と舞を始める。

ファードの服は、赤く、血に染まつていた。

わずかに声量の欠けた呪文。

その中で、ファードは変わらずに舞い続ける。

「 つ！」

その呪文は鮮烈に、強烈に弾け、ファードの左肩をえぐり取つた。

「ファード！」

唐突に、呪縛が解けたかのようにフィオナは叫んだ。

力が入らなくなつたのか、だらりとなつた左腕をぶら下げる、ファードは苦痛に顔を歪めることもせず変わらずにエリニコエスへと向かつていく。

エリニコエスの放つた炎が周囲の木々に燃え移り、夜の闇が唐突に照らされる。

それは、真つ赤な血液の色。漆黒にも近い色の影が、辺りを覆う。うごめくその様は、酷く不気味だつた。

ぶわりと、熱風が頬を掠めていった。煙が辺りに黒い幕を作り、火花がちりちりと視界を歪める。赤い炎は、だんだんと強くなる。まるで、戦いや血の臭いを求めるようにな。

「ファードつ、血が！」

「大人しくしていて下さい」

「 つ！」

駆け出そうとしたとき、柔らかな声と共に喉元に剣が当たられた。辛うじて傷がつかない程度の強さで、喉にぴつたりと押しつけられる。

動けない。

少しでも動けば、少しでも口を開けば切り殺すぞという気配が、背後から漂つてくる。殺氣、というのだろうか。戦場で、たくさん の兵が感じてきたであろう感覚。それはかつて、行かせてくれとせがんだ場所。

初めての感覚。それに、フィオナは成す術もなく息を呑み、身を縮めた。

「……少々心苦しいのですが、これも仕事なのでね」おどけたように言って、アギナルドはちらりとファードに目をやつた。明らかに、挑発している。貴方の恋人が死んでも良いんですか、と。

「フィオナ！」

叫び、振り返りざまに剣を振りもう一人の腹を絶つ。腕に響く確かな手応えの後、胴と下半身が真つ二つになり、悲鳴を上げることもなくそれは転がつた。

「貴様！」

真つ直ぐに、ファードの剣はアギナルドの心臓を狙つ。辺りに満ちる死の香り。

濃厚な血の臭いは、全ての感覚を麻痺させる。

「残念だけど

アギナルドは柔らかに笑つた。

「君の負けだよ、『狼』」

カクン、と崩れ落ちた。

その後ろには、女神達の生き残り。

糸の切れたマリオネットのように、ファードはその場に崩れ落ちる。

「『獵犬』も『狼』も『人間』も、『神』には勝てない」

一人になつたエリニユエスは、そう呟く。

「ファード？」

フィオナは目を剥ぐ。

喉から剣が離され、フィオナはファードの腕にそつと触れた。

「ファード……、ファード、いや、やだ！ やだあ！」

閉じられた月の瞳。血にまみれた姿。背中に生々しく広がる焼け爛れた跡。えぐられた左肩。辺りに広がる血液の臭いに、赤い炎に

黒い煙。

そして、エリーゴエスの手の中にある紅い心臓。

指の隙間から、血液が紅く滴る。

「まあ、獵犬も所詮は人間のペットだからね。利用価値がなくなればもう必要とはされない」

仕方ないよね、とアギナルドは言つ。

「それじゃあ、そろそろ帰りますか。マリア王女、お手をどうぞ。僭越ながら、“狼”に代わり俺がエスコート致しましょう」

アギナルドの手を振り払い、フィオナはファードの体に縋り付く。

「イヤつ！ やだ、ファード、起きて！ 起きてよ！ 目を覚まして！」

「もう死んでいる。目覚めたりはしませんよ」

「ファード、ファード、お願いつ！ 目を覚まして！…」

ファードの遺体から離れようとしないフィオナに、アギナルドは一
つ溜め息を吐く。そしてフィオナの傍らに跪いて、にこりと笑んだ。

「何が、何がおかしいのよ」

「……まあ、魔法は使えませんが、俺にもこのくらいのことは出来
るんですよ」

ポケットから懐中時計を取り出した。

力チ。

時を刻む、秒針の音。

「少しの間、大人しくしていて下せー」

力チ、力チ、力チ。

パチン。

指を鳴らす音と共に、フィオナは崩れ落ちた。

深い深い、悪夢の中に。

ぐぢやり。

ファードの心臓を、握り潰した。エリーゴエスの生き残りは手の中

のそれを無感動に見やり、地面にたたきつけた。

「所詮は犬か。……惜しい男」

仲間の死を悼むでもなく、嘆くでもなく、復讐の女神はかすかに笑つた。狂つたような、柔和な笑みを。

「行きましょう、アギナルド。我が悪神」^{アーヴィング}

赤々と燃える炎に照らされながら、女神の生き残りは真つ赤な液体にまみれた腕でフイオナを抱き上げ、艶やかに笑つた。

「そうだね。ここは少し、熱いから」

アギナルドも頷いた。

穏やかな、赤子にでも向けるような優しい笑みを浮かべながら。

第六章 暁の婚礼

1

城の一室であたしは一人、机に向かっていた。

硝子の万年筆をゆらゆらと所在無さげに揺らしながら、月光がそれに反射して輝くのをぼんやりと見つめる。

少しだけ、見惚れる。

きらきらと光りを反射するその様は、とても綺麗だと思ったから。……けれど、あたしの思考はゆらゆらと違うところばかりを迷う。

満ちていた月が半分に欠けるまでという短い期間、あたしは一人の男性と共に城を飛び出した。

鮮やかに輝く、綺麗な月のよつた瞳。絹糸のように滑らかな金色の髪。

誰よりも、あたしを想ってくれた人。最後まで、あたしを守ってくれた人。そして、あたしのお兄様。

本当に、美しい人だった。

誰よりも、優しい人だった。

あたしは明日、結婚する。

相手は隣国、オーグランドの第三王子アレス様。

通り名は “鸚鵡”。

・

「貴方が、 “アレス様” なの?」

「お初にお目に掛かります、マリア王女

あたしは思わず一步後ろに下がる。首筋に緑色の翼の刺青を持つ
その人は、晴れやかに笑つて一步前に出て跪き、あたしの右手の甲
に唇をあてた。

「そんな…貴方、どうして…」

「先日、国に戻ったんですよ。両親とも、それは喜んで迎えてくださいました。六年前に家を出た放蕩息子が、ようやく帰つてく
れたと言つて」

クスクスと、楽しげに笑う。

「マリア王女。……いや、それとも“セレネ”とお呼びしまじょう
か?」

「ああ、本当に、貴方は実にお美しい方だ。貴方の前では、美の女神
アフロディティさえも震んで見えてしまつ」とどじょつ

「……」

あたしはただ無言で、青い瞳を見下ろした。

「今度こそお受けしてくださいますね、マリア王女。俺と、結婚し
て下さい」

「……手、離してください」

再び手の甲に唇を寄せようとすると、アレス様はあ
と咳いて立ち上がった。

「本当に清らかな方だ。まるで真白な百合の花のよつ。

……ああ、そうだ。式のときには、貴方に良く似合つ大きな白百合
のブーケを用意させましょつ」

「……あたし、百合は嫌いなの」

言い捨てて、あたしはその部屋を出でていった。

真珠に、ダイヤモンド。たくさんの瑠璃石がじゅうじゅうと散りば
められた真っ白なウェディングドレス。
長つたらしくて鬱陶しいヴェール。

華やかなティアラやネックレスなどのアクセサリーに、吐き気がするほど甘ったるい香りの、大きな百合のブーケ。

色鮮やかなステンドグラスのきらめく教会に、パイプオルガンの音色がゆったりと柔らかく響く。

その中で、あたしはお父様と腕を組み、赤い絨毯の敷かれたヴァージンロードを、ウェディングドレスの裾をずるずると引き摺りながら歩く。

お父様の横を離れて“パロット”的に並ぶと、神父様は喜びに満ちあふれた晴れ晴れとした笑顔を浮べた。

気のせいかもしれないけれど、その笑みがどうにもわざとらしいもの見えてしまって、苛々してくる。だらだらと神父様が長つたらしいお話をしている間中、あたしはネックレスやヴェールの裾をいじくりながらぼんやりと突つ立っていた。こんな気だるげな花嫁など、せつどどこを探してもいないだろう。

素晴らしいわね、なんて素敵のかしら。

幸せそうね。ほら見て、本当にお美しいわ。

辺りから、そんな会話が聞こえてきた。

……素晴らしい？ 素敵？ 幸せ？

何それ。

何処が？

本当にそんなふうに見えているのかしら。きっと目が悪いのね。

素晴らしいことも素敵なことも、ひとつだつてないわ。不幸の絶頂。“結婚”というものがこんなにも不快なものだなんて、思いもしなかつた。幸せだったら、こんな不機嫌の塊みたいな気持ちで不愉快な顔している訳ないじゃないの。

全く、何が幸せなものですか。

思いながら両サイドに広がる客席を見まわしたとき、その中にあたしはお婆様の姿を見つけた。

……黒いドレス。

お婆様は、まるでお葬式のとき着るような漆黒のドレスを着ていた。その隣にはお婆様同様、黒いドレスに身を包んだエミリアまでいる。少しおどおどとしているが、明確な意思を持つてそういうふうに見える。お婆様に、何か聞いたのかもしない。

黒は、死者を悼むための色だ。結婚式など、お祝い事の時に黒はご法度。そんなのは常識なのに。ふと、お婆様と目が合った。何かを期待しているような、どこか楽しげな表情のお婆様を見て、あたしは思わず泣き出しそうになつた。なんだか、ありがたくて。

小さいころから思つていたけれど、お婆様はすごい。全てを、見透かしている。

やつぱり、お婆様は魔女だから。

お婆様はあたしの方を見て微笑み、一つ頷いた。これからどう? と問いかけるように。エミリアもかすかに口角を上げ、笑つてみせる。

そうだ、まだ泣いちゃいけない。

あたしはこの結婚式で道化を演じるのだ。

……大丈夫。

……大丈夫、出来る。あたしには心強い味方もいるのだから。ねえファド、あたし、今でも貴方のことが好きなの。

こんな人と結婚なんて、絶対にしないわ。あたしは誰とも結婚なんてしないし、するつもりも一切ない。子供だつていらないし、マリアなんて名前もいらない。あたしに必要なのは、ファドと“フィオナ”という貴方のくれた名前だけ。それ以外のものは、何ひとつ望まない。何も要らない。

こんな国、あたしの代で終わらせてやる。

全てに幕を閉じてやる。

今、あたしは道化だ。

全てのものに終焉を告げる道化師だ。

終わらせよう、全部。全部全部、何もかも終わらせてやる。

「 病めるときも、健やかなるときも、生涯、互いに愛し続けることを誓いますか？」

神父様の言葉に、パロットははいと即答する。

……全く、忌々しきつたらない。

でも良い。

これで終わるんだから。全部、終わらせるんだから。パロットにもお父様にも恥を搔かせて、笑いものにして、そして、終わらせてやる。そう思つて、あたしは少しだけ笑つた。

さあ、ゲームをはじめよう。

楽しい楽しいゲームの始まりだ。

この式全部、めちゃくちゃにしてやる。

今までのこと全部、今まで思つていたこと全部、何もかも全て思いつきりぶちまけてやる。あたしは百合の花びらを一枚千切り、手を離した。百合の花粉が、真白な手袋をわずかに汚した。ひらりひらりとそれは軽やかに流れ、音もなく床に落ちる。

「マリア様、貴方は、誓いますか？」

「……あたしが、誓うとでも思つてているのですか？」この人との『

永遠の愛』を？

静かに、そう言い放つ。

この場所に居る、全ての人に聞こえるよつと。声を貼り、良く通る声で。

神父様は驚いたように目を見開いた。

あたしは“マリア”じゃない。“フィオナ”だ。ファドを心から愛し、ファドに心から愛されたひとりの女。

“マリア”はかつて、お人形だった時のあたしの名前。今この場所に、マリアなんて人はいない。あたしはもう、ガラスケースの大人形を気取るつもりはない。意思を持った人間として、あたしはここにいるのだ。

あたしは、フィオナだ。

「……誰が誓うのですか。大体、こんな人のビビをビビつ愛せと言

うのですか？ あたし達を騙したのですよ、この人は。あたかもあたし達の仲間みたいに振舞つておいて、容易く、呆気ないくらい簡単に、あたし達を裏切つた最低な人です。愛せる要素が何ひとつないわ。こんな人を愛せと、こんな人と愛し合えとおっしゃるの？不可能よ。他に、あたしには好きな人が、心から愛している人がいるというのに。

……知つていいのでしよう？ あたしが男の人と駆け落ちをしたって話はもう有名ですものね。その人の慰み者にされたとかつて言う信憑性も何もない失礼極まりない噂もまことしやかに流れているみたいだけど。このまま式を続けたいのなら、あたしに誓いの言葉を述べさせたいのならその人を……、ファードを連れて来なさいよ。今すぐ！ ここに！ この人と結婚？ このあたしが？

……確かに“マリア”なら大人しく従つていたかも知れないわね。アレは、ただの飾り物のお人形だつたから。だけどね、あたしはもう“マリア”じゃないの。あたしは“フィオナ”。あたしは“マリア”という名を、“王女”という地位を放棄し、投げ捨てた人間なの。あたしはもうあんたの娘でも何でもない。あんたの言う通りに動くと思ったら、大間違いよ

神父様からお父様へと視線をやり、怒鳴り付けた。お父様は眉を寄せ、怒りに満ちた視線をあたしにぶつける。

『大人しくしている』

『お前は私の言うことを聞いていればいいのだ』

何度も聞く言葉。まるでそれが聞こえてくるようだ。あたしもお父様を睨み返した。初めて、はつきりと拒絶した。昔はあの瞳をとても恐れていたのに、今は全然怖くない。なんて馬鹿馬鹿しいのだろうと、冷めた視線を向けることができる。

『マ、マリア様！』

神父様は慌てたようにあたしの名を呼んだ。周囲がざわざわと騒がしくなる。構うものか。ここは舞台だ。あたしの、初舞台。何が何でもやらせてもらう。邪魔なんかさせない。

「マリア、落ち着いて」

パロットに手を引かれ、あたしはそれを振り落つた。

「止めて。触らないで、汚らわしい！……安心して、あたしは落ち着いているわ。これまでにないくらい、落ち着いている。それから、貴方に呼び捨てにされるのは……いいえ、名を呼ばれることすら気に入らないわ、止めてちょうだい。たとえそれがかつての名前であっても、あなたに呼びかけられることほど嫌なことはないわ。全く、不愉快極まりない」

ブーケから百合を一本抜き取り、パロットの顔に叩きつけた。

「……何を」

「百合の花は嫌いだと言ったでしょ？ 聞いていなかつたの？」

一步近付いてきたパロットを、あたしは思い切り睨みつけた。

「近づかないで。……残念だけど、貴方を愛することは神に誓つて永遠にないわ。 まあ、信じている神なんていないけれど。とにかく、あたしの一生を賭けても不可能ね。誓いの口付けなんかしうものなら今ここで舌噛んで死んでやるから。あたしは誰の指図も受けたりしないし、誰のものにだつてならない」

あたしはただ、思いの丈をぶちまける。

もう、止まらない。あたしを止められる人間など、ここにはない。

「何よ、結婚も何もあたしの意志なんてまるでないじゃない、全部がお父様の独断じゃない！ なんで、なんで全部決められなきゃいけないのよ！ これはあたしの問題なの！ いい加減にしてよね、自分のことくらい自分で決められるわよ！ あたしは誰にも干渉されたくないの、あたしはお父様のお人形なんかじゃないの、あたしだって感情を持っているの！ あたしは、誰のものでもないわ！」

まるで意思のない人形のように扱われることの不快感を、屈辱を、あたしは嫌というほど知っている。

人として扱われないということがどんなことか、自分の無力を知るということがどれほど辛いことか、ここでは誰一人として分から

うとしない。ここでは、自分の無力をどうにかしようとする」とすら許されない。

あたしはお父様に向けて言い放つ。「これは復讐だ。何が何でも分からせてやる。分からせなければならない。

「あたしは、お父様のものではないんだってことを…」

分からせてやる。あたしの主は、あたしでしかないのだとこういふことを！

ヴェールを半ば垂り取るみたいにして外して、腹いせに呆然としている神父様に投げ付ける。

ネックレスもイヤリングもブレスレットも全部外して力任せに投げ捨てていくと、ばらばらと小さな宝石たちが床に散らばつていった。そして最後に、手袋を外してアレス様の顔に思い切り叩きつけた。

勝負の開始を告げるように。

一つ息を吐き、あたしは続ける。

「……あたしが心から愛することが出来るのは生涯でただひとり、ファドだけよ。」

あたしはパロットをひたと見据えた。

「確かにファドがあたしの実のお兄様だつたつて聞いたときは驚いたわよ。驚いたけど、だけど、あたしは彼が好きなの。誰がなんて言おうと、あたしが愛しているのはファドだけなの。……ファド以外の人と一緒になるなんて、有り得ない。特に、あなたとなんてお断り。顔を見ただけで虫唾が走る。絶対に嫌。死んでも嫌。

全く、こんな薄ら寒い猿芝居、馬鹿馬鹿しくつていつまでも付き合つてなんかいられない。冗談じゃないわ！」

本当に、冗談じゃないわよ。

やつた。言いきつた。

言いたいこと全部、言つた。考えていた文章もなにもかもめちゃくちゃになつちゃつたけど、だけど、言えた。初めてだ。そう思う

と、緊張の糸がぷつりと切れた。

あたしは崩れ落ち、その場に座り込んだ。

「ファードを返して……返して！返してよー！」

なんだか色んな感情があふれてきてしまって、抑えられない。

「ファード……、ファードっ！」

あたしは泣いた。

百合のブーケで床をばしばしやりながら、大声で泣いた。

彼の名を叫びながら。

……愛しい人。

お願いだから、あたしの名前を呼んでよ。貴方のくれた、あの美しい名を。

あの美しい薔薇の名前を。

『私のファイオナ』

白い花びらがあちこちに鮮やかに散つていいく。けれど、そんなことは別にどうだって良い。

……ねえファード。

早く、迎えに来てよ。

真つ白なファイオナを一輪持つて、あの時みたいに。あたしを迎えて。

『私のファイオナ』って、笑いかけてよ。

……ねえファード、お願い。

お願いだから

……

「これでラストです。
楽しんで頂ければ幸いです。」

さて皆様、今宵の物語はいかがでしたでしょうか？

嗚呼、かくも儂き物語。

憂いの月が良く似合つ。

切。

語り部は小弦を爪弾く。

まだ明け遣らぬ空に、残月が浮かぶ。

儂き調べは風に乗り、有明の月にじわりと溶ける。

『恋とは甘い花のようなものである』

これは詩人、スタンダールの言葉で御座います。この言葉には続
きが御座いまして、『それを摘むには恐ろしい断崖の端にまで行く
勇気がなければならない』と。

甘く匂い立つ柔らかな花。それを摘む勇気が、一体どれほどの人
にあるのでしょうか。けれど、ああ、全く言い得て妙。あの一人の恋
物語を表すかのよう。

ああ、そうだ。

皆様はご存知でしょうか？

清らで可憐な白き薔薇、『フィオナ』の花言葉。

『恋の吐息』と書つねつです。

愛しい人に想いを寄せて零れる吐息。

儂きものです。

さて皆様、これでわたくしめの物語はお終いに御座います。わたくしめの持つこの小さな小さな物語の壙はこの通り、もう空っぽに

なつてしましました。

月もそろそろお休みの「」様子。

ほら皆様、ご覧下さい。

東の空がじんわりと、紅く色鮮やかになつて参りました。
有明の月も真白で鮮やか。ああ、実に美しい。薄紅く染まつたた
ゆたう雲も風流なもので御座います。

さて、お次はきらきらと眩しい太陽に相応しい、爽やかで晴れや
かな物語でもいかがで御座いましょう?

わたくしめのこの頭の中には、物語の壺が百も二百も御座います
故。

んん？ なんと、もう眠たい？

これはこれは。気付ませんで、大変な失礼を致しました。お美
しいお嬢さまに、気高き紳士殿。皆々様の静かな夜、眠りの時間は、
わたくしめのやせやかな物語に姿を変えたのでしたね。

確かに確かに。

皆々様の瞳は、もううつらうつらと扉を閉じようとしていらっしゃ
る。さすがにもうお疲れで御座いましょう。長い月夜に物語を紡
ぐのと同様、朝日に身をゆだねるのもこれまた一興。

朝日と共に眠りに就く。

そんな贅沢をするのもたまには良いもので御座います。今日はも
う、小鳥たちの子守唄に身を任せると致しましよう。

それではまた、いつかどこかでお会いできることを祈りつつ、こ
れでお別れと致しましょつか。

それでは皆々様、良い夢を……。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1534r/>

フィオナ

2011年3月6日14時25分発行